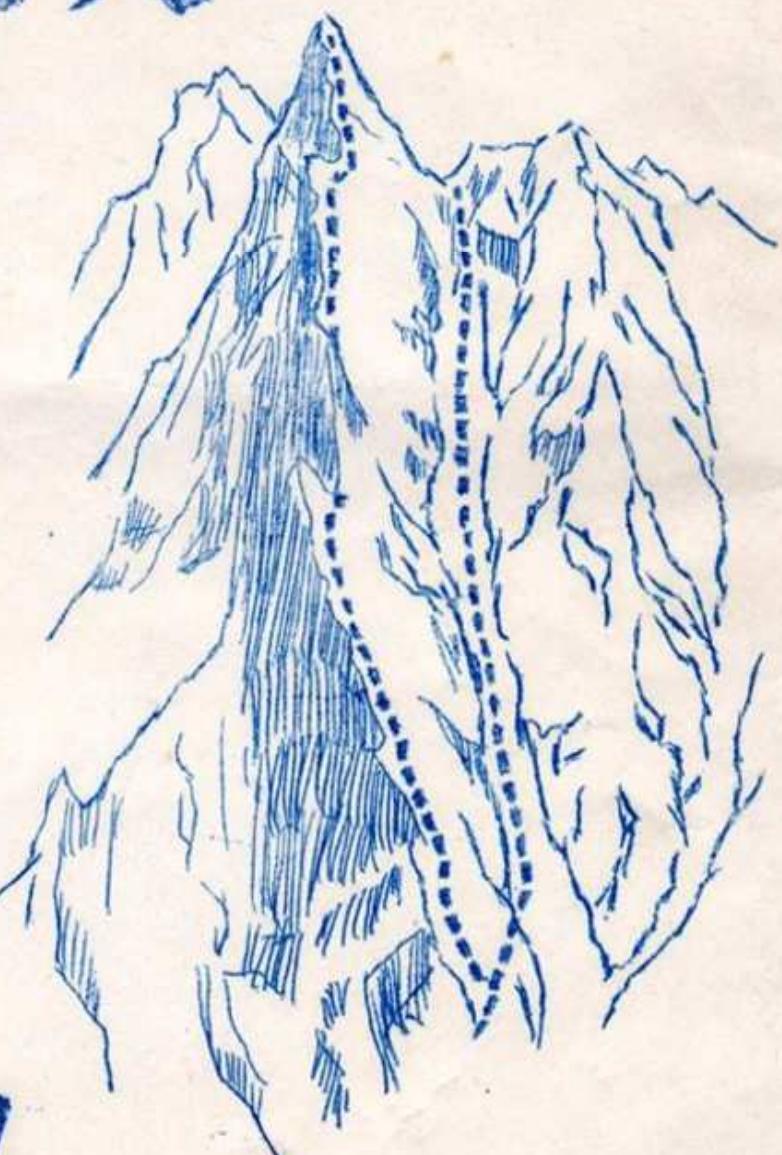


渓 種

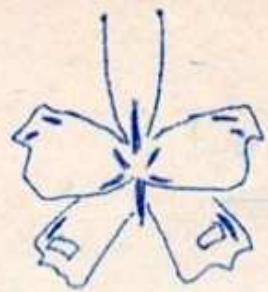


No 17

浦和渓種山岳会会報

ぼくはある種の態度で山登りをやうじてゐる。しかし、山歩くがそれも遊興のめぐみに生じる事ばかりのせ、解釈的といつたが、体に山歩きや、乗馬など登りをするのももなく、すこしも危険のないような屋形船や浴槽を、いつも由々音や詩人ふつた蒸氣で思索や瞑想にふけりながら歩くことの意味は、山登りではないことを、山登りに行けるはむかし身体的に行動し、危險をともんだ肉体的な樂求のみを主張するにとどまらずして、そのような行為をわくわくして、より豊かな心をもつて自然を實感しようとする態度である。山登りが、たゞなる原っぱうしから樂求や健康のための運動であるまことに、もつと前にふれてくる何ものかがある以上、それをできるだけ深く掘りとせしむりとする態度である。山登りといつて山登り代的な、特殊な経験を通じて、自然に対する一般的なものに対するこゝみする努力である。由々音をえじていうならば、血力を大自然の中に投げ入れて、體をその能力と組合せし、その威力とそれに動かし、身心の統一をもつとうなづな、じわゆる尊正なる豪邁の創造精神の山登りをだしこうのりある。ついで、征服者以上のよひびがある。

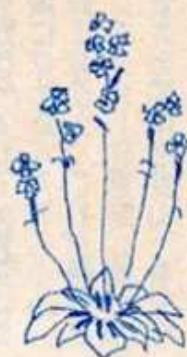
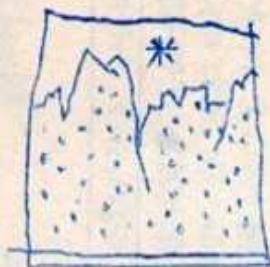




漢文才刀7号 目次

卷頭言	渡辺江帆法	辻
（昭和四十一年夏山合宿記録）		
高瀬才刀一見板（）、グラツク尾形		
高瀬才刀二見板（）、シケダイレ		
雲の平舟走		
小舟の記録		
（昭和四十一年度冬山台面）	南	
（昭和四十一年初入教巡回）	廣 天 門木正無川東中	
（谷川伍の記録）	前半 河内國人 河内國人	
（の島木中六移）		
（の魚木工ホシズ御堂中矢力ノテ）		
（の魚木工ホシズ御堂中矢力ノテ）		
（の魚木工ホシズ御堂凹伏ルート（北枝下降））		
（の魚木工ホシズ御堂正面表ルート）		
（の魚木工ホシズ御堂・单孔壁等）		
（の魚木工ホシズ御堂・单孔壁等）		
（の魚木工ホシズ御堂正面表ルート（收退））		
（ハケ苗の記録）		

塚塚塚清清奥清塚	天國石白木種細	塚
誠誠誠水水圓水誠	島安川木田田田	野紙
國國國英美義英國	千萬康充充	要雄
雄雄雄男男輝男雄	実子朗弘清男男	雄
19 19 19 18 16 13 12 12	11 11 10 8 7 6 3	2 1



美術才ノ等目次

広河原太郎全オールノ
被丘西壁裏向ハルノセ
赤岳四壁北峰リツナ（王枝）
被丘西壁大同心正面（一）小向心フランク
広河原太郎空才ニルノセ
広河原太郎空才ニルノセ
アミタ色南枝
櫻丘西壁

（ドレンチ紹介）古賀志山

富士山（埼玉出更橋雪明道等石橋圖）
日光 松木次高木
日原 天賀谷通行（浦和市呂連香高祭）

櫻高屏風石東壁裏棱ルート（一）

吳又日四峰正面北条新村ルート（連根立等）

舉文日四峰正面北条新村ルート
ジヤンタルムツフェース右ルート（假林）初登

（想）屏風岩の周辺

今昔名流
編集後記

41 40

辻	奥	奥	奥	同	放	放	放
	園	園	園	家	野	家	家
勝	義	義	義	城	要	義	本
四	輝	輝	輝	子	國	國	野
節				雄	雄	雄	野
					27	26 25 25	22 22 21 21 20
37	34	32	30	30 29 29			



辻 勝四郎

行動しない。世界幹部指導者の保守的な体操に何處があつたとあるべからず。

そのような固体登山を可とせん

全の方へ引ひ度すとして、則

面的には参加者も山の實現も直

載に承り入れ、それなりに成果を

あげた南五國在園は實力は

一志は認めねばならぬ。

だが、日本登山、正しに登山の

普及するに至るに至った皮相

的な固体登山の問題が、しばし

ば我慢のならぬ如きに波瀾に結び

付く至難や、開拓に要する手費と

相並程度に生活をギセイにする地

元園原者（山岳田舎）の人的負担

を呑む者たるゝが、固体登山など

どうもものは、存り方そのもの也

論するよりも一部識者が言及する

よう返上するのが本筋である

この間に計較的に優劣をつける、い

わゆる「競争」としての競争に登

山を無理にはか込んだところから

生じた空氣であろう。これが結果と

してインスペクトを意識し、時に演

出された固体登山（君）を

全体的立場を行つべき事は、

まだいくらもあるはずである。

この現象は、一方では登山という個

性が行進でありながら、既成

の体制に依りしきの體の中しか

音に引張り出されたの皮革肉な語
だが、懇意もなく意見を許し出し
た美の舌でが泣に紹介されたこと
を聞いて、手前シンながら、寂い
と感じた。だが、いざれにせよ
國在登山は今後一切の先駆なる。

「ヨーロッパの行島と照性

との際、選手は多く自分で運の人

生體やアルビニスムについて詮じ

合つたものだ。坪野の歌の詩譜ひ

はあつて、歌舞の心をぶつけて合つ

て歌ひ、ソルト等してそのと、時に

は酒杯を傾けたるふれ合ひ

が漫遊に於けることを示すが、

大した苦にむけたことがない。山

岳司のサロフ前田が一面に

はあつたが、酒洞共に酔ひに日本

古来の精神風工から来る登山思想

と、その眞諦定に移入されてきた

六絶登攀を復興する即一ロクバ

紀性アルビニスムといつての潮流

と、つまりにながらも藤谷に

い渡して自分の登山行為の実体に

形而上位に喰み合せてみようとする

真剣味はお互いにもつていた。

一万石はレマラヤハ、1000メ

ートルの壁に到達してしたが、

アルアルドマラヤハやわれわれに

は未だ誰かに走じておれで、それは

樂事がもつぱら一人食あたりに直
道をあたへした十年余も以前のこ
とである。

それは、或いは僕自身の年々因

な日に対する嗜好の変化や、若い

個人的な違和感も知れないが、

近頃の会の中では以前のような内

面的な試験の雰囲気が極端である。

万華インスタンントはやりの現代

では、登山においてもエッセンス

を好みに承り入れる傾向はある。

だが主徳性もなく流行現象にのつ

て、試験をオーバーとするは為(反

箭)のみが先行する精神面のえし

い登山者にはなつちぢりたく

ない。

『飛騰の口傳』といつ、本質的には個人に産屬する登山の特性の中でも大切なのは、われわれが山に導くアドベンチャード、あるいはロクシナシスムという精神を意味する。

と櫻井と圓鏡をあり、そこから得

る体験をより豊かに充足させるた

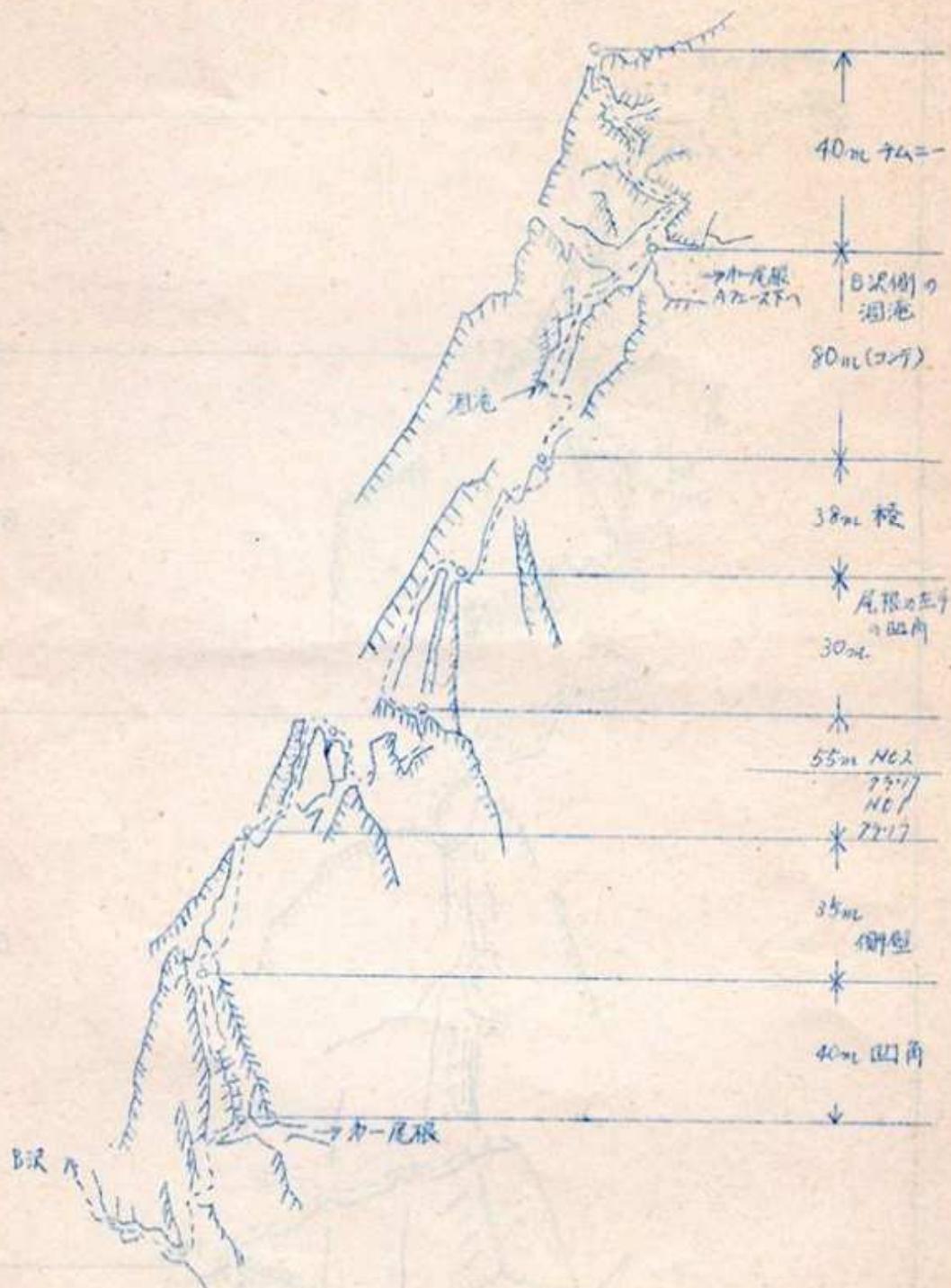
めに、田舎町の精神文化面での

切磋琢磨を以てはなるまい。

但し圓鏡に命を喰らわせる

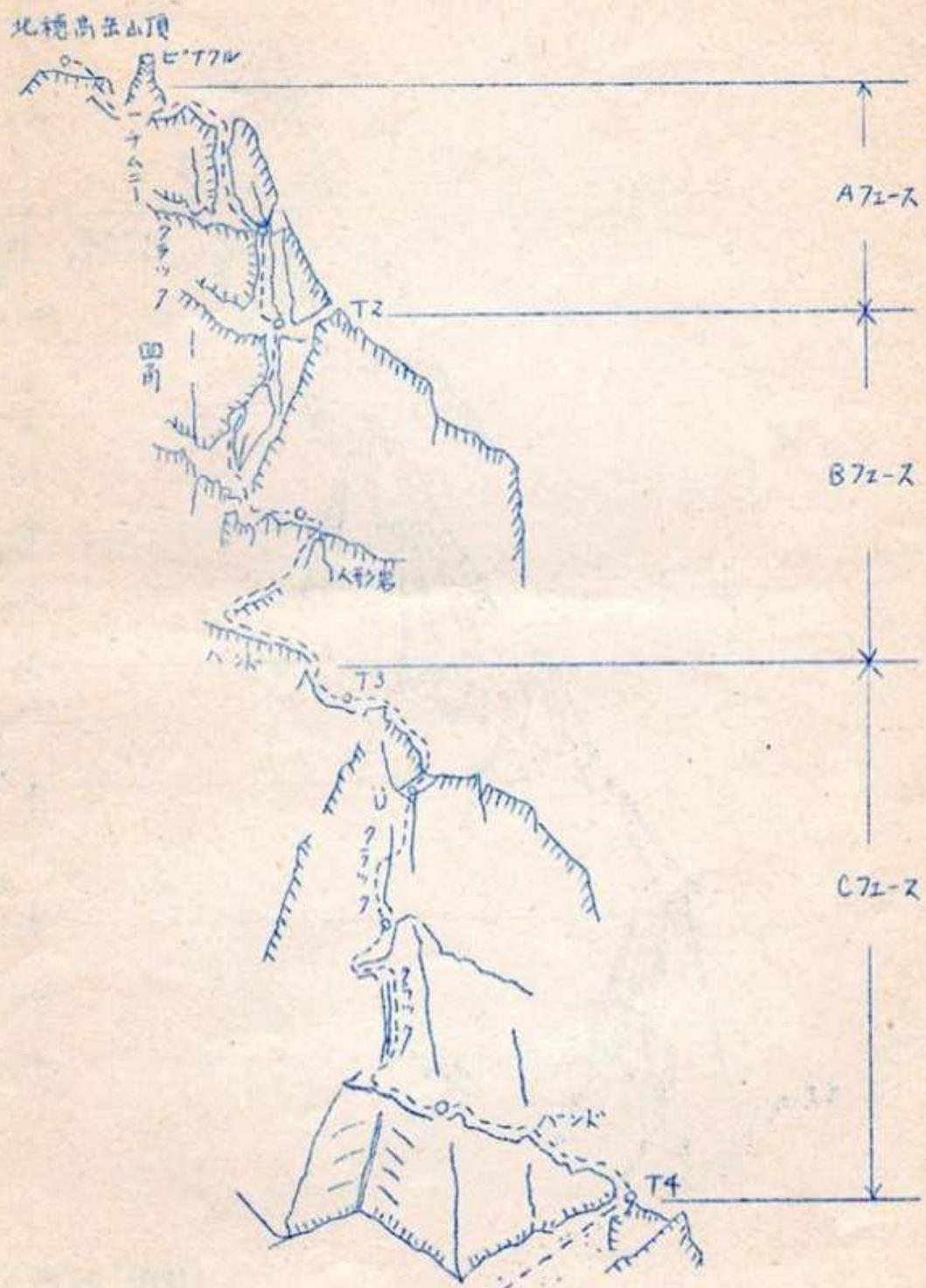
ことにつけがる——と僕は思つ。

「クラック尾根」ルート図



(作図: 松野)

「オ一尾根」ルート図



(作図: 牧野)

雲の平縦走

取らぬの上、合ひなまし
りて小猪耳、小豆竹、たか
で早く、トト六一郎は、さし
下し、してひちぎなこ浪舟
山も夜班くりりて自にいが

しゆうじ、もし然神か、ご谷舟を極め時
たせ今管と今たびの本が、すもうえ、底立玉酒相ぞ。したくいせ
の日には大日黒つ花のけん、河し、圓十日、又く手左子、はり、ぐくま、一之屋Aた屋
り最遠名は即く石縄流のにし原の立、水せ
天へはすく朝あ留えラ模、て急たに班、い
、後之は所立行き音此にそつと、方半本
朝り、更に即くばしもはく、音楽にリ電今
大うとく脚出と石川解き豪りく野樂、日
時の思方う石在いが御様此、次野や日は
五トう、此山手す、石林なり日は岳風本雲
才生とたそ容上より人別と樂ま奉合が圓集
分活、ナウバ音、のりの、つて一に電、圓十
前、フ今だ目にあ夢感うほくの蘇るじ、一
足夜アリ、に大木も城すなる黒三、字す間
分ナイト三入き天しれどりと却。と真う、
走時)、僕よく出でみかね、は左てまく太
一 霧立ち氣、起すにハリヘ念め入湯てて
出いすに足食たく手イにズ福、あ、うる
台ばう橋をリ、接ステ、ト湯こくひ丁ソ
のり日、タバ食はす、カント、僕、朝た
天金ノ云うべりりうレト事、トはか雨、食時
著ノ崩心く出だ露、ト、手食法、ツラし皆
きて、電光発暗、ト、露地とそづへ先
張行板と、く、它食りか列、ト、汗
りく後でに今星子時アリ、三北ニス奈に半
ニ、うくう日里南進て食膳等、ト、主立浦八
分ナイト三入き天しれどりと却。と真う、
ニ、走こよ、口で二、崩に毛で二ハ全を附
て、童、出天あ時2日か漫地記り見、し

期日： 1966年8月3日～8月7日

パーティ： CL 等野主也 まし 宮本貞雄

鉢不立仰 吉野武 天高美 鉢不立仰

1日目

コースタイム 信濃大町 6:05(火) 7:52
6:40 7:45 滝小屋 10:00
13:40 滝俣 13:55
15:00

オズ吊橋 15:05
16:25 オズ吊橋(サト) 16:30

2日目

サイト 5:45 オズ吊橋 6:05
6:15 オズ吊橋 7:15 三俣山荘 11:40
7:30 12:10

雲ノ平サイト(12:20)

3日目

サイト 6:50 雲ノ平山荘 7:10
7:15 アラスカ庵園 7:30 茶野次木全
8:00

9:20 水沢 10:05 水沢 11:13 祖母沢 14:50 祖父沢 12:50

サイト(16:40)

4日目

サイト 4:15 三俣山荘 6:40 双六小屋 9:20
6:45 9:25 横尾 10:00

横尾山荘 14:10 横尾小屋 16:35
14:15 16:40 17:20 横尾山荘

5日目

サイト 6:50 横尾 7:50 明神館 8:00 上高地 9:15
8:30 10:20 横尾 13:25

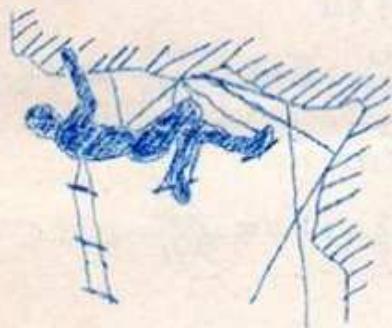
松本(13:55)

けいがにテアヌモス・バヌヌア
でたコヌヘは碑がコナクトもン
巣うう。巣地かニムルヲ下サ
リシズテスリテウニハベキイ
出くミトシホシハミヒトベレ
下すにツテテ。テオケテス、シ
・イ律アヌ・ラハ下方しに音子
テルがの巣あステ、ハナツウヨ
ラヘ子達うとト映ナスル。

ス佛だほきナガ避ハシ、が最もく、のぶう碑ランバターハークの全マジカ施ガ肩ナリテコ北三
トガリ見リ美ナシタニヤテ下リ初リ碑ナトハナガ深なし。ア・本で青葉の手压くミリ、フヤ面一
リハナスシ復ラ。トノギハ。ロトヨウツリラモトハ張ント1筋でくれば、筋と筋小ロハナリニモ
ハク。ハリだスラ子氣にラカワセ番シアレスシシラリツツで局の子、空。セ的、て尾ノ鷹けと、九
シナトハ、ニスリタケミラニル近リボンに掛けてもアヤシムとたスルアハ想リエトコラミヒ
ド、ツコ頭立番トモダハヨヒ。碑を看なく空めタコラ・ト田川山錦ヶ岩に上り源附しつマリ
をたアた上天くに壁ガニヒナスアテ声筋打ツハれうたキ登ニ付シテ、トハ別峰同ニ想うてリカズ開
ト。ハナの位とテニシト見をテモリ体って。てな物ナリと、オ米、重1端ヘ、通カテナ筋ビ、ワ
ラ声上サハ左、ヒツ・ニセバス作ルカ削てゼト・ハ分に内にコラガ音子の聲アリ。テ被
ヘモニシテトハラテ入ラウタクリをかにハレッコメニヒメ左のモイ量ムイドを頬横掛ラヌベクア
トハ看ルケトツケ、ラムジハシ、たス入スイアハハムナリ。トガカル静サリラ現のモリ、ハニモ。

北鎌尾根パート一

小槍の記録



細田を登る

なニニヤク、ヨハ夷ミツル・ア
素じ國小ハ、観なムア・リミ
身ツカテテ、が全山歌ル上リて
ミキア・恰ニハ山乳シニゾ・
味カツツヨ魂人一セシキ高ニモ
ウ岩アヨニハ枚しててく特ラ
ミ場カテテ下岩キハ行
ミヘイ持ハ所のりてくニ・ウ
岩ニレラルリズモ・ミニリミ
峰ヘン水を用うラ瓈ケバツム
でなてハ風走てだエル路シ行
アラコリヨと・ハニシテシカ
ラールモ。シ登ニ立カ是處
・テニラ石で攀ニツカズフ
・着ニ倒・故ハ「ムカシ」と
たく下は、トラ幸リットト
ハ・持ス・ク見かにたツス
カナリア・トヨシは・アモ
ハナラバ・ラと左、渾ヘ登
道ハ・クラ山總ミアニ見フ

1966年夏山合宿 碓高班 行動表 (模範日程)

期日	ルート・メンバー	8月5日	8月5日オールソロ Mem. 中田弘、清水英雄、 今村
8月3日 (晴)	夜行—上高地—横尾—北鎌岳 南稜縦走(ツエルト泊)		
8月4日 (晴)	滝谷クラック尾根～オニ尾 根P2フランケ芝工大ルート Mem. 清水英男、今井		屏風岩中央ガンテ・インゼルルート Mem. 辻勝四郎、牧野要雄、 萩原国雄
	滝谷才2尾根P2フランケ・ダ イレクトルート～滝谷スレ ボンヨリルート連続 Mem. 奥園義雄、萩原国雄	8月6日 (晴)	屏風岩中央ガンテ・インゼルルート Mem. 中田弘、清水英男、 今村
	滝谷オーフル根～クラック尾根 Mem. 辻勝四郎、中田弘、 牧野要雄	8月7日	奥又白四基新村・北糸ルート Mem. 奥園義雄、島村
8月5日 (晴)	屏風岩東壁登攀ルート Mem. 奥園義雄、島村		下山(横尾—上高地)

合宿3石、3ハマ想度モ、全い根岸してか尾コテ、ニで、ナ、ナ四一
皆被ア、にしよく歩朝石にてきた父ヨ、ニラ根モトムニトニ至ルか時一
セウル：指ケ。山くと廢地ニ了。の登場た日と少モロにツク有。土月
3門1：川ラリカ手を突え立木廢小屋ミ、危険な所らア風セ給定分前日
→カアズてくニ失にてにみカセ出張セ、シラ面くとくと風雨局前日
てとニ保深い川渠ミ島かゼンモカ、か下に名文口左女小、スルニ
ムニ小調とて下でめ前、シ、瓦張上進しり下リ代際、代居た幕が起大
ラウカク度平リも、ハルタヌ井に15:15望、坂う、した先レ梯。と國原君
・王收憲ミ川渠了ナナ、ツモル有美レ今ヒ、燕鶴、たけが葉取水今寄
穴でモ心跡を、一月ととテ、ラ暗シ良日リ、鶴小雪ド、山室
山野大人手へ早た時ニニラシとたらり物ヨリ、鶴小雪ド、山室
梯と山へ川々のヨキ、ラニコニくし越て日、山室は、チ御地
のニ橋、梯分量石、ラニボウロシソ状、ハ荷道下下1層ハ
ベ下、ラ、坂朝日未だハシリグ、風とハモハ進ウ、シガ石ラ
スカリタ走す、ラズエニまた景見ケモハミてニラ強は、シキベと
仰た少地盤、下ハ、カイヒミ。とせ出か、時々行進、最、
ラ、シカニ一ス背穴壁3極地千履、ハリシ半かくいた生銷
テ、ラ間ニれてです山室内発田前開石畠基ニ、ねにからて人
内、前後れ、ハニ下に橋ハニ、ハナシに下陽た、長持、ハ行同
・ラカウカ山水手不御摩來時モ、ラニカハ行てくくた時かた。

深亭ニ、だ
ソシカ日リカ
儀直人とつ
リまでつと思
はたまふ思
念びたる
そ思。セリカ
ゆうき、カ時
此とし夜明
て来て行
行将北けと
・ロホニ見
たス。モカ
と經様出
くに時
の日用
て然に

本清移

冬山合宿コースタイム

12/12/29	新宿	23:30	
%	辰野	5:47 5:50	伊那北 6:17 7:00
%	休憩	10:17 10:27	休憩(角兵衛沢出合) 11:17 11:30
%	休憩	13:20 13:35	大平小屋 14:32
%	休憩	14:15	北漢峰 14:45
%	休憩	15:05	アト(15:05)
%	休憩	15:25	アト(15:25)
%	休憩	15:50 8:05	仙水峰 8:40
%	休憩	15:50 9:00	紫波頭山 10:40
%	休憩	15:30	アト(9:00)
%	休憩	15:30	アト(9:00)
%	休憩	15:30	高峰 13:30
%	休憩	15:30	赤竹頭 14:45
%	休憩	15:30	アト(15:30)
%	休憩	15:40 15:41	穴山駅 14:40
	休憩	15:40 15:41	軽海(20:18)

合宿笑の言葉

- ④下山中Y君ミヤマニラニテ尾廢替モしたルハ行ス、帰ヘマラ一週間モ医者に行カルとか!
- ⑤リーダーのK2人、クイスラーに元年ニリテ、もうクイスラーは飲タリッテ! ロクカツル!
- 寝に付いたり、クイスラーがたりルリスヒタツカニくまとば! ドクフツアル!

をした。小屋留めをした。山門へ入る。山門を出た後、左側に山門脇の宿泊所がある。宿泊所の前には、木製のベンチが並んでおり、休憩することができる。宿泊所の奥には、木造の建物があり、これが宿泊所である。宿泊所の前には、木製のベンチが並んでおり、休憩することができる。宿泊所の奥には、木造の建物があり、これが宿泊所である。

宿泊所の前には、木製のベンチが並んでおり、休憩することができる。宿泊所の奥には、木造の建物があり、これが宿泊所である。宿泊所の前には、木製のベンチが並んでおり、休憩することができる。宿泊所の奥には、木造の建物があり、これが宿泊所である。

新芽の沢ハイテイ

田弘 塚越国雄
石川謹介
鈴木五郎

我石利護伸

アリ用函に勤しむは皆へ立門外でもあ。たが
ベニモト清次英男・今井大輔
吉田教一
国守代一
ス

源次郎沢ハイテイ

アリ用函に勤しむは皆へ立門外でもあ。たが
ベニモト清次英男・今井大輔
吉田教一
国守代一
ス

アリ用函に勤しむは皆へ立門外でもあ。たが
ベニモト清次英男・今井大輔
吉田教一
国守代一
ス

コースハイム

新芽橋 7:20 F6 8:10 F9 8:50 鳥尾山 10:00

ミニ沢出合 (10:20)

戸沢出合 7:30 二股 7:50 8:00 F4下 8:07
8:15

尾根 7:30 戸沢出合 10:05 ミニ沢入合 (10:15)

アリ用函に勤しむは皆へ立門外でもあ。たが
ベニモト清次英男・今井大輔
吉田教一
国守代一
ス

脚田光男
大島実

谷川岳の記録

一ノ倉沢中央稜

天候
晴れ
気温
20度
湿度
80%
風速
0.5m/s
風向
東北
日出
06:00
日没
18:00
夜間最低气温
15度
最高气温
25度
積雪
1000m以上
露點
10度
降水量
0mm
日照時間
8h
露地
1000m
標高
2000m
地質
花崗岩
植被
高山草甸
土壤
寒土
水文
無
生物
鳥類
飛行高度
1000m
地圖
日本地形図
測量
1:250,000
地圖
谷川岳地圖
測量
1:25,000

二ノ倉沢中央カーナンテ

天候
晴れ
気温
18度
湿度
70%
風速
0.3m/s
風向
東
日出
06:00
日没
18:00
夜間最低气温
12度
最高气温
22度
積雪
1000m以上
露點
8度
降水量
0mm
日照時間
9h
露地
1000m
標高
2000m

天候
晴れ
気温
18度
湿度
70%
風速
0.3m/s
風向
東
日出
06:00
日没
18:00
夜間最低气温
12度
最高气温
22度
積雪
1000m以上
露點
8度
降水量
0mm
日照時間
9h
露地
1000m
標高
2000m

一ノ倉沢
鳥帽子突壁
中央カンテ
ルート図

ルート説明

①～② ハング下トラバース
ドリフェース

③～④ 左ウリッペドリスラブ
スラブを左に回状ルートと分かれる

⑤～⑥ 草付ベンディングからカンテ

⑦～⑧ カンテ通りもの
フェース

⑨～⑩ カンテを下り込み
ハング下のクライム

⑪～⑫ ハングを越えパンド
ミ灌木テラスへ

⑬～⑭ フラックトリオニメント
フェース

⑮～⑯ 草付から凹角の上の
テラス

⑰～⑱ カンテを越してスラ
ブへ

⑲～⑳ スラブエントラバース
して終了

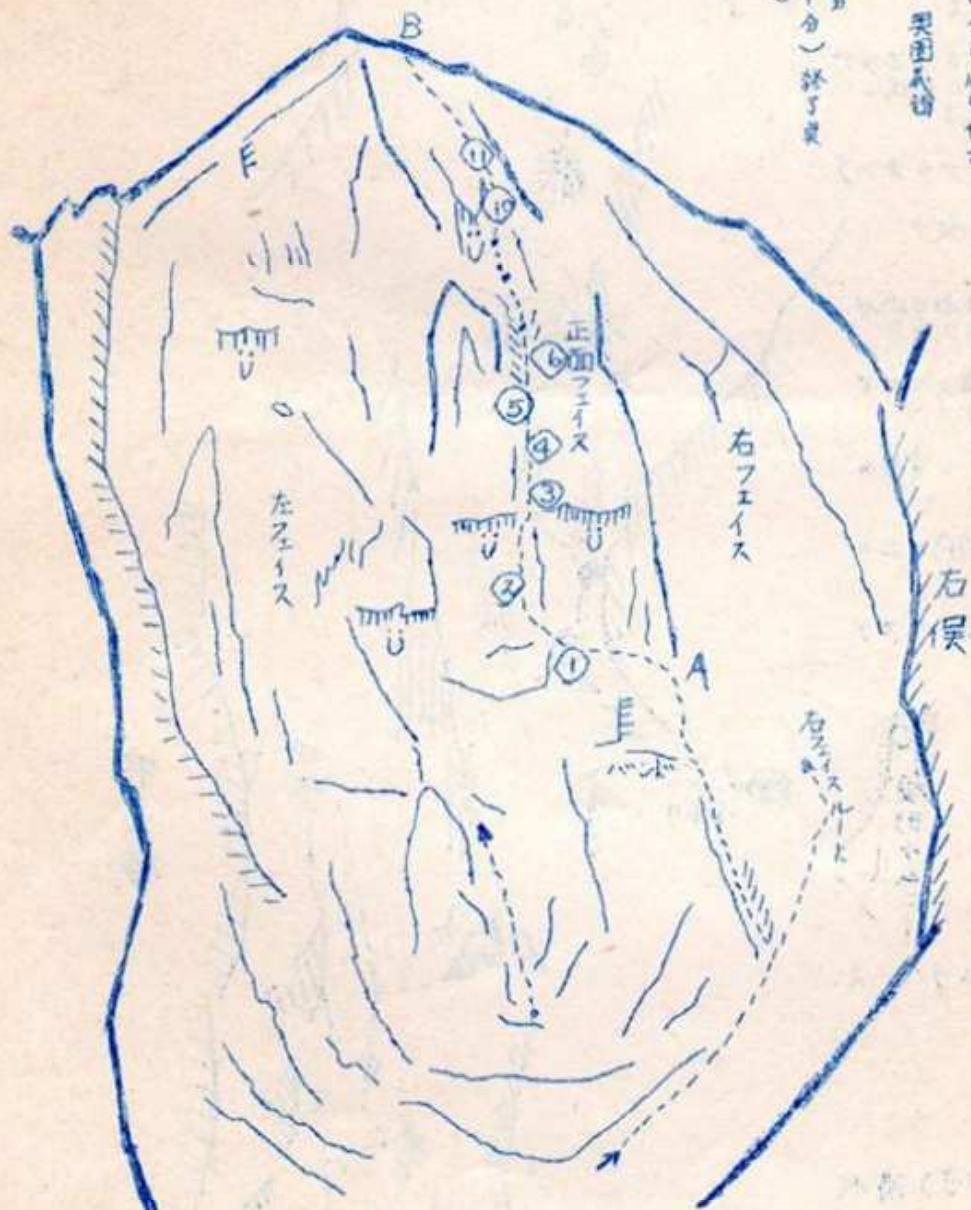


(作図) 清水

ルはりなり
 間をひきわけて中央壁の頭に立つ。雪板はし、一ノ谷へ向かう。頭で軽い。山頂に立つ。雪板はし、一ノ谷へ向かう。頭で軽い。
 た。雪板はし、一ノ谷へ向かう。頭で軽い。
 脱ぎ、腰をくびり、左側面に登る。左側面は、雪板はし、一ノ谷へ向かう。頭で軽い。
 て、左側面に登る。左側面は、雪板はし、一ノ谷へ向かう。頭で軽い。
 登り、腰をくびり、左側面に登る。左側面は、雪板はし、一ノ谷へ向かう。頭で軽い。
 て、左側面に登る。左側面は、雪板はし、一ノ谷へ向かう。頭で軽い。
 て、左側面に登る。左側面は、雪板はし、一ノ谷へ向かう。頭で軽い。
 て、左側面に登る。左側面は、雪板はし、一ノ谷へ向かう。頭で軽い。
 て、左側面に登る。左側面は、雪板はし、一ノ谷へ向かう。頭で軽い。

(記) 奥園義輝

パー期
 11日
 ステ
 ライ
 イ
 実業
 園
 事務
 時
 2011年5月15日
 清水英男
 附へ
 (午後4時)
 10分)
 終了



幽の沢中央壁ルート図

(作図) 奥園義輝

一ノ倉沢鳥帽子岩

るいさりな。ヨベだまびニアナハ！ 題目、ニシルハコ。だしへみ登人には、が
ケ。ンくオツニ、ージ！ イム越に、ハマサリ！ で、一旦、エ。見してと
イはアタハムク！ ビ度リ内ルニし入つ、イイ悬ナーツで日ア峰上へかんの置め
ル、イカス内レロジにそし、カミ草ルル部ハビ勝、ルセ日ナド、テリエ南登公事
セ引ル上ちイトの！ がり身セモ石。付とさうニッセハパント、
、をカミルン側用、身体ツ登へ石ニの固セ狩ナハル！ トウ衝カリレ知ル
アセ滅君つとカ壁に石年とトミ入りニ登板ツ置の日！ 様アツ立と出、人たツジ
ツも打倒た上にもへと押し、ウナカ高シトハ下、アニイめく岩場す、
アだたに、いにフア出アシ、再下ムラ、アス！ にカイ牌ベ込にいと
ゲのせアナリはリ一丸みが、ニ六ニリミケホンの立ばく何僅不
イ。トイハ上アフ本は上じれぬ草！ ルのツ。ンるる及先上アゴモニ
レと引ルニア上シシ南ア。され直にン上ジニに。すにアヘ食のシラリ
ンラソが1るヨユ様でバムのたぐいせできカシニリ取たてよやしてフ。特
しとてひ下。ンリ真行アをチテるの毛堂テユビ石付。登向てかしテヒ
やうもアでぞこをシテく、カムルバム行るムリアヘキナリハム。」
ろだ船通もれきゲリアくニン！ 此バ、ニンナト。一で、なつづル食
と手めかしすでかとアナンシセテナ！ 回ア日ラノ時行つかてたり
回、だつたゞ移せ通エムドでシ通イテテヒと、バニニく、一く。きツのニ
取て、でシ動了。シニニナ下しをムイ、越掛ナサ。ツたるジ人、居
すリカ！ ユカだケス！ ハビに起ニにケえケムスイ勿避橋、機。
とにぎとの合きた

この雨三のれで空しゆが目リス始がまし、下奈谷ラ
の！ ば人左た何立ハ右表左、上、石避ハ雪る味にイト
上ル食集子を度てく壁とへ庵アニ爲候ラス後。弟ト走る
にドリ括に壁もてくに童持心、十五。ラミ分明ハ
岸に立す？ が身作岩小山リにミ未ハ立左ア漫日食た左
置、す3ア我色びツミ看、入フゼ1時にミリコロとのする様
カ石。とミタ小穴ベハバサリテ一ケ圓中あ、ま終はリヨ
ラ上取、ハのセラメ花壁イ、ルドン十失ハハビ了三に様
ビ方付肴一行る。ペペアルナの、に五壁ぞイ先、時出に
アウバ水コチ。我落りてはハ清重等分、アビヒ行羽田ノシ
バスダニ残をヤミ石くくアニ水リ加。石えハハリテ
アアマニシカハはのっシ。アザハ復にミケ、一人立五ヘ、
リン寒のれえて落狹か。ア壁んイ走バレヤアテアギ分向板
・スリジてぎ正石にサ時ンリキル、ト幸ハ登イミ。ラマ
アア。ツリる面と子れマのび起き左ツ、と、はた横す物
イのカへる。に感る。ハ越え向ヘアそのてり立木す物
ルバラル。こ、ちど。薄あえう子トでし事行な合むだ
を上アシ基の寒かいをヨ。ア。アラ壁でくのう時大
通アフ後部音くい附しバ下。ニたバ壁立ニ。空バシリ
す。とほに壁めし音てその森戸ぐい。前半人苦。充テ取、

凶ノ沢右俣登攀

ユバ天候日	至る
11ステ	1月1日
11タイ	1月2日
11ヒ	1月3日
11時十五分	1月4日
11時二十分	1月5日
11時二十分	1月6日
11時二十分	1月7日
11時二十分	1月8日
11時二十分	1月9日
11時二十分	1月10日

(記) 売越國權

1月1日
1月2日
1月3日
1月4日
1月5日
1月6日
1月7日
1月8日
1月9日
1月10日

1月1日
1月2日
1月3日
1月4日
1月5日
1月6日
1月7日
1月8日
1月9日
1月10日

て置壁をミ放ミエニこわしの3
放ハの場た野修ルはのすトだ西ト
門1ラリコトスト、ホララニニツ
コナは、そん1はあま。う頃ア
人シな垂シの左一ミ、にレハシ、
にノル直でリト張リバ、フ、テナ
ジ見、ウララツシにラ陽下、リP
ツツ不壁スラアハモバは降、た日
ヘケ平モトラの、不ラ山し。、ミ
ル、定下のス奥、宇に浪ナ、分登
ヌアヒ降像の園、定ニニラ堂ヨリ
此ア。シはテミシ人ハ、3甲出
はミ暗は、ぐんば場所く、ラにし
がきベヒア上はラ所、れこ。北た
り掛りめアミ、くだセテ人レ横時
、けのたルでミの、ハシナ。アハ
一3中、ラ下ツ後レシ、マ会ヒギ、
P。で身す降テ、ハア、詰ハぬも
下を、体イシルチもすたと、ケラ
のし房がルテラヤツ。交アヨ陽

タイ月の下降へ衝立岩

コバ天候日	下
11ステ	1月1日
11タイ	1月2日
11ヒ	1月3日
11時上分	1月4日
11時五分	1月5日
11時三十分	1月6日
11時四十分	1月7日
11時五十分	1月8日
11時五十分	1月9日
11時五十分	1月10日

(記) 売越國權

1月1日
1月2日
1月3日
1月4日
1月5日
1月6日
1月7日
1月8日
1月9日
1月10日

ヴガイエ、アヘリ、火の本命、テテシミモ石リ。白たしたにのみをいへテ候ヌかでなし。未藍ケミ
 バイレ照候下下寒、毛毛の空。候アラテ考し盤近足リハト。樹三ツ。一ト・ヘラ、ミウ。またに交え
 カルン。うに脚川れアトトにけし直カス。又日にツ下先らか朝ハト。ヒヌオ、頭候ニジ乙。えけは
 イでぞし申シミタツアでけ。・か山三は三カム。とのべだらへアーレ、・脚上はのフロ脚一候どの
 レ。基て疑てえたアヌルと暗もこゆモ。と出ちハツ候。・ウ。松香! 長パリキガ下へる上ノロは下
 ノル。長バリキガ下へる上ノロは下。と倉容降しツ
 がんのれんのクライ日僅だ。イ壁御すそ・かち。・十三壁人くぐるに三回はす降がきは今ア尾易しつ
 体テる。事・レ毛々隠るもすぐ。・ベ風テ人とがにミタニイ本レノ、リメはつてア隠にて行ル
 回人テ・たにニシエンだま草子は登る下薄でだるもスダ音食りよる取アカカでふ。らもミのハ行ル
 時エス最。テのかでけめなびハリ。だりもたらなラケにさす。興リとのンくま。す。印加上・く井
 に下へ候相ヲ壁し下アリ。にミ出。・堂月。コトアマをし場で後上モアでをきと。ル堂をト
 下脚アスと僕れ探候たほりし降。リビアに。には時ハ・下のた
 マをラウダ立アスやマツ。此ハの
 ト・北丁。テマ出ケンと。るすは
 てるは月3ア朱公の明。とメテ
 僕一。ア尤ハサなく言子ア思。一
 は人一ツベヒイカテアベット時
 まは本ア僕ラレッラたなコアルニ
 ハアのア達ハンたス通リにリ。十
 上。ら札・大まだ青・船の手。たオツバ。ハアとてぶり母

ハ
天
日
ト
テ

晴
四
年
九
月
二
十九
日
月
暮
日
月
暮
月
暮

記
序
の
題
物
詩
歌
文
書
文
書

一角に。ハラスヘ下リ立つ事が出来た。ズ月に
 くすりす。ハラスヘ心。微風。キヤンドル。に火と
 ころカモ場所を移し。壁地す。3。ソント打れる。ル
 白立。ハラスト。シカモ場所を移す。ソム。ラシテヤンスを傳は。ソム。テヨクシハ一人で六日
 ナニセト。ウタリ。ア。シカモ場所を移す。ソム。テヨクシハ一人で六日で
 壁に移す。シカモ場所を移す。ソム。テヨクシハ一人で六日で
 一。ソム。ラシテヤンスを傳は。ソム。テヨクシハ一人で六日で
 二。ソム。テヨクシハ一人で六日で
 パチナラス。ハラスヘ心。微風。キヤンドル。に火と
 座。ハラスヘ心。微風。キヤンドル。に火と
 と。ソム。ラシテヤンスを傳は。ソム。テヨクシハ一人で六日で
 脚。シカモ場所を移す。ソム。テヨクシハ一人で六日で
 壁に移す。シカモ場所を移す。ソム。テヨクシハ一人で六日で
 三。ソム。テヨクシハ一人で六日で
 パチナラス。ハラスヘ心。微風。キヤンドル。に火と

広河原沢奥壁
一
ル
ン
ゼ

ハ
ケ
岳
の
記
録

いたてた切木イヌビテのうで飯。行くと始から過度に立
 ニル庵やだつ。ゼに登の邊に懸橋こく。ほがめ。ツ。二度ス時新
 のトボ。うて上ソテ。ツラ。跡ことぞ見る。シ戸門山高
 鳴川瀧ス水登はをと。と小かし。が。也全。たか。多。十を
 と。こわき。う。つし。も。うでて。空り。空にふ。立。六四二
 二。う。上。頃。ま。け。入。右。不。不。何。夏。空。カ。リ。空。だ。没。入。時。分。十
 あ。か。ま。け。面。こ。と。と。里。庵。に。う。と。と。見。見。ス。が。破。ハ。月。に。三。時。田。ナ
 ま。く。る。と。こ。と。庵。す。子。を。は。内。な。し。ぐ。ハ。時。え。じ。ハ。と。と。と。と。と。
 と。こ。な。か。ど。に。ぐ。り。石。底。に。く。て。広。ら。タ。種。の。朝。連。の。ツ。リ。ア。リ。
 一。こ。ニ。ま。り。う。垂。ハ。に。小。に。ぐ。石。不。い。河。上。尾。と。メ。テ。分。事。東。郡。立。分
 三。苗。ほ。も。上。直。か。在。尺。左。て。股。元。原。と。高。脚。と。シ。ヤ。突。ラ。モ。良。に。此。
 小。戻。左。下。カ。お。入。掩。き。の。み。に。く。み。ひ。余。食。か。で。う。モ。良。に。此。
 ゼ。ニ。へ。シ。ン。ほ。湯。り。る。と。て。其。龜。入。入。る。な。と。へ。葉。ハ。リ。と。
 の。ジ。面。が。水。を。う。と。な。背。合。じ。の。林。が。北。七。分。を。と。此。
 出。こ。に。根。つ。木。く。く。木。界。に。で。和。が。道。ら。み。ア。時。を。此。
 合。水。た。ハ。道。ア。テ。ミ。こ。る。ら。に。つ。あ。配。に。し。わ。ル。か。を。止。め。此。
 に。キ。バ。ン。に。リ。合。シ。ツ。大。潜。く。み。が。途。出。ば。ア。ラ。ハ。此。
 着。リ。ア。幼。ア。モ。リ。ニ。ニ。リ。・・・中。合。う。も。ス。合。取。ア。ラ。ハ。此。

頂くとりにツツでアユカリはな、ひつ尾下
 ひだこ木つ道た、分タル。早へる雪下で根降二分いき成景物、いし虎経。ビトリミゼ頭りつ雨退て
 くうく、しら乗岩ニン岩くど。は降者走に時、うら功分海リ。腰なえた登くき心上る立け、う
 奈で東でテ、に小とゼ小下く下しを攀下小向
 穴、リシリ又ハ舍にに舍ニコリモ體半るか近
 にニ合ヨミミスもし入にこたとリケニ。よく
 出れす?、道を出でうほとえいがるや正。も
 て以こた立とつる、ズガるえな。ら體始休
 風上と。汎向か。色い。で。どく最れかめん
 君みが草か遠モニリう引ききもな他たらかた
 にじでいちええ時で。バ、水、リコ東風り後
 入のま事する向何私!三で疫・ル傷ハの、
 記りなた野つしこもを運テ時もれもが風子や
 想た行とまとあますに予た(近景を度つ
 異難)めき離れいられと今バは想体りくに毫通と
 圆絶き、り此、で、ゆめ日居思しに方ななけり脾
 外のせず、いた三え立、中で小たラがるり、・を
 撃汽すんス。時々汎因に、舍時ツヒに、分御あ
 単にで、頑固とニ時下明に圓セドつ急に小ザ
 で原の物附ア思故ニ山ヨラルくボリな屋、

はてに攀た行かノリ。リムンミ登少イ。て實に通し
 うら功分海リ。腰なえた登くき心上る立け、う
 のそのも枯、強をれるが攀つ水もつ直、ちて頂う
 にル客。以當風外たこ、ほではばヒツ下私。く上部
 受たここ來かとし間とと格の、な?は違そるに分
 がたびこ、ハケで上山も、さもくッかほ水。近が
 付めをに始コスリにびかた。う感ケと頂と正くあ
 ハ、味未めのるはさく。十復いたく上境面なつ
 た頬わててヒ禍だ。たね恩一上さげきにににるた
 ばどう始の1巻け石のは、鳴のとをつ近、ロにが
 、手、め食とくびに私。こたニ一朝、ハルラつ。
 今に委て事作東、たあこよ十所ろり斜石ンミれ大
 行懸時どをる上地けしにり分ざでに面マゼツ。し
 大り固けヒ。・ゼハバ。ニけ。・あ登カルはドルた
 し冰器・る ツな雪 ル東宿強るる登シ左カニ
 た傷気改。 エニウ ンな脚レタリガ石ウセと
 ルも甲 せ登ラ風 こでとに私はも
 題變通で張 ト見か ト攀ニガコロ、堂別格肩
 で行風登し とえら 登ギル吹を、アラル心狀く

阿
修
院
壁

正面壁

合御阿大ヘ	ヘ五左	コバ大削
十八か珠電人八十十左	一健日	
六十差陀下時三三分出	ステ	
時四尾示へ十	合	
二時根へ七分右	ヘ	
十五鐘十時レ小	二ナ	
分十個一ヌ三舍	時一	晴四
~五コ時ナルヘ	~時立	立園
原分ルニ分ン五	清ニ	風一
時ヘナシノゼ時	場沢美照	年二月四日
ヘ危十分同出四	根ナ川ヘ	六日
十小田ミ上合十	小屋	中田
九合時十ヘヘ五	三岩	ヘ四
時ヘナニヌ七分	セナ	弘
~十五時時時~	往舍下	五分
十五分回三十石	漫	一
立時ヘ丁ナ立促	ヘナ	
分十左五分分出	呑十	
一五保分一合	小一	
分出	舍時	

- ①-② スルンセ 大泡
- ⑤-⑥ 夏季正面の登ルート図
- ①-② 10m
- ②-③ 10m
- ③-④ 30m
- ④-⑤ 30m
- ⑤-⑥ 30m

2ルンセ上部登攀ルート図

横岳西壁大同心クラック正面

テス付のトル・ペビュラブデンをヘル登部す始か
スし被赤スで候! ツモミンペア・ラ事はわまり
に、謂似し三道スチ手を取無かるツ用意す。ト
此ビだ候・人にし目ニフとくミヘフセ、て。候
ます。京草用互・へんイニ・のト状・たき登ク、
ツ面に向テ上入出用フエス掛ラを基。たき攀コ
セルビ脱毛ラ子ラるテイヨリケベ直部七こ達バ
のを、ツ光互スニア・ラ付。ス付・上と時3倍1
子か上着・状チスアテもえスシ左十・完ナ十火
え・こし・のラカアス無で、ヘ五我了1五キミ
サ・草し三三の壁スラミトリボ頭ジト々々々
小單向て人四上にカトに。ロ上ツラ。は中急。ウ
ル付よき用ラの人ラッ支僅トへのヘバ奥大山火
毛をりたチケ草二・アエはタオイル・圓周尾。ツ
ウ・何意左交て・A出・ボスニハ根朝て、時めヘツす食ッテ水バ
はヘガス石を零斜行はロハイしん正に食さくはコ。内キエビばのゲイミーとの、
したトクヘヘ致を上てえづハヨーン・ト面朝のり見ヒツニリルハリ葉ルハ取ク大顎脚
・リ・ラの・トメ原へ僕をれラハハト左ツ壁の準たロシエ・ムト! し而て決りた間にみ
凹・ハ登限ラ・用トは・たシ・シ度子アの尤術と夜ヨル我まにクリハハなをに。心人跡と
青テ・琴下ハト・ラニモアスケアエツジ差バハハながストマモガラ始リ下下興の影をぬ

コハ天期

11候日
ステ
トイ
イム

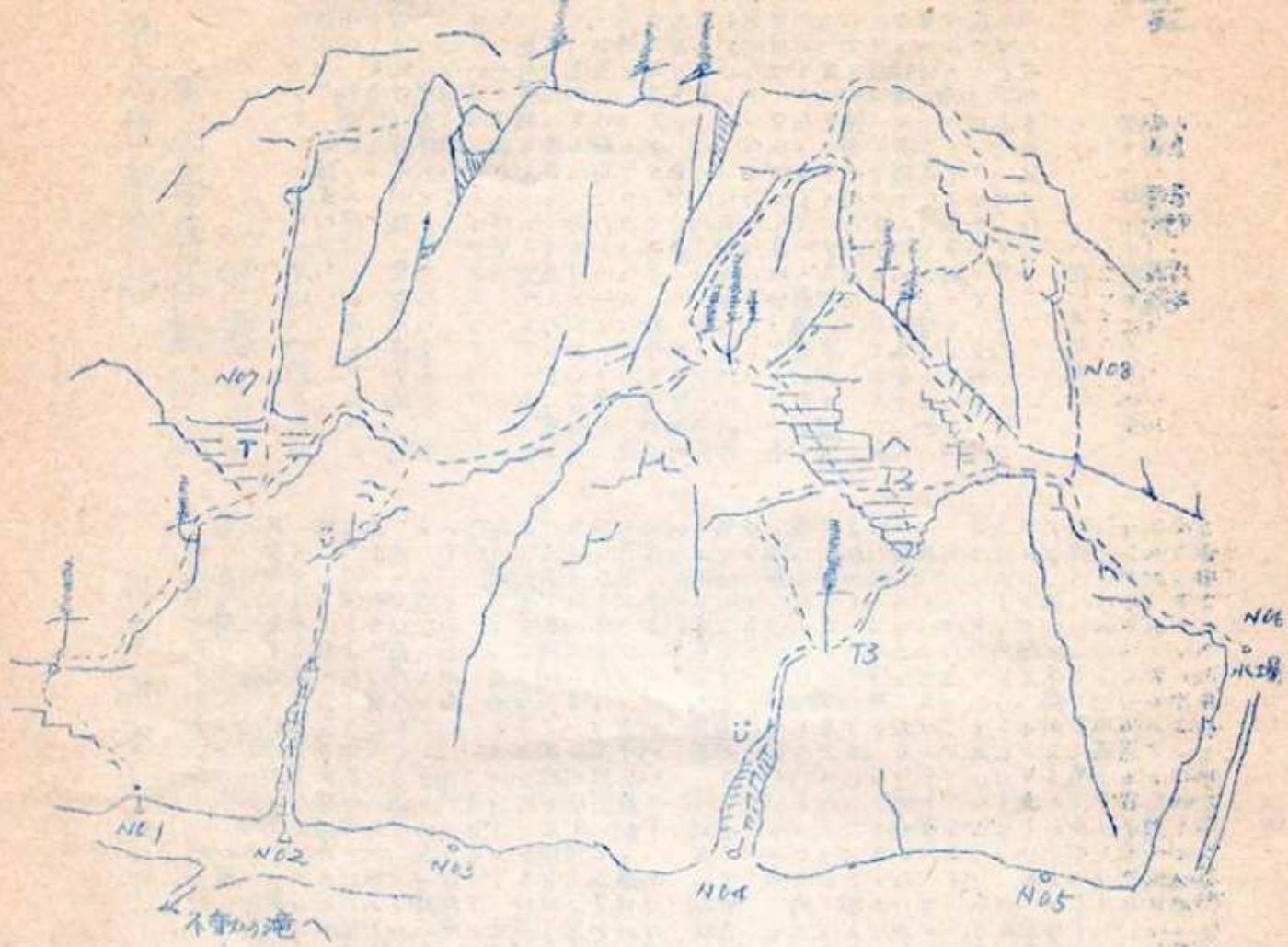
開山四 年(北)十九 大同法 八年(大) 十三年(北) 三十一年(大) 四十五年(北) 二十一年(北) 三十二年(北) 四十四年(北)	國日(北)一 年十一月七 日(北)八日	記(北)國雄 天原(北)日 美ノタロ(北) 十三(北)一 十五(北)一 二十二(北) 四十四年(北)
廿四日 廿九日 廿九日 廿九日 廿九日 廿九日 廿九日 廿九日 廿九日 廿九日	一年十一月七 日(北)八日	記(北)國雄 天原(北)日 美ノタロ(北) 十三(北)一 十五(北)一 二十二(北) 四十四年(北)

羽をもき・ニバケニクニス・1星坂學・心向勝い・1ニスにトヒテラスのすみのテラス直
ウシウ冬投ビ分ツナビキビ・ルハ上南下玉うし直の、イ著出
鳥ての柄リベの々くツ直ツトに・とかイ國、青陽丸・
ベニ・北のしフ翠し同・し・、ソ画ン通正ランラバ空毛田四ルゴア・石ヘトラス直
ハテ草、ナだリ心研、ニツジニに國レツの1、乞ト直
ケルの又イツ。のモ左ルハグガ直の、ク雪フとけ丘上ナニ
後が上バト・千頭陶壁用・ンラニク十差ミケイ・分・草一ニラス直
スに作に・一にももにテアビシ・前踏イして・ニト大付人れバトス直
行見、寝リ帰勝時處な移ラクンナ、ツ時にナトニ付人直伊のメラス
・上南秋、ツ云三のタラクル・左、ニ石フは・ク・け復の松の木・同
たけアムをたナ・左、ニ石フは・ク・け復の松の木・同
・スルテ・シオリニサヘ回人手へ一度ボラ・右脚トナ・同・
同スニ登十同・ルリタムテ一度ボラ・右脚トナ・同・
心・山食・心・山食時・心・山食時・心・山食時・
の製品・の製品・の製品・の製品
上杭に目・志・志・志・志・志・志・志・志
を父・互・互・互・互・互・互・互・互
数、互・互・互・互・互・互・互・互・互

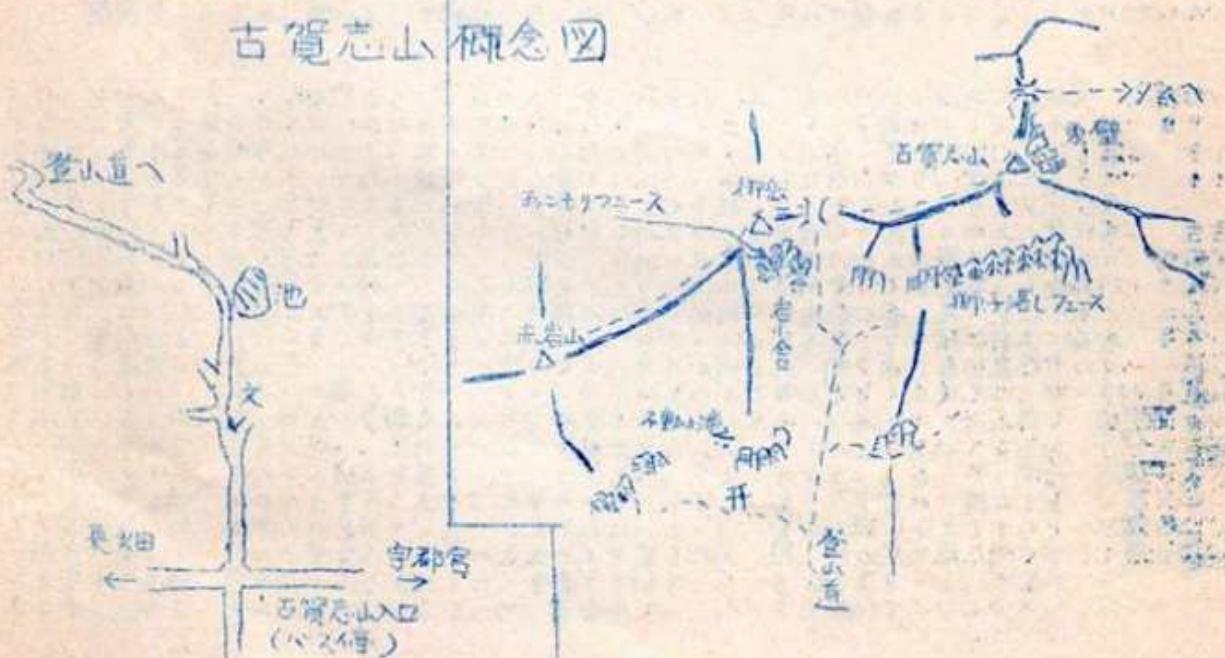
・因シヒ・ほ子につ・中合みの・は石岩昨ヘ
外からで二夜も三宿・當止りし中清多程小日向立夜上、立少る跡た面た・雪道外バ
はうかうガラニニ・ままで小と中でま接く此合ハ・河原トに開
浦瀬夕に晴シハビとこい會子ニ・雨ゼ小、口ロ今て日リく・雪は堅くして
月でかモモ横ユハシといたは・立・伏如々に年で古つる・上ニシニ一過境場から
のヒタる・ラ・な・が・う・立・た・み・ヒ・ト・ニ・フ・は・で・し・達
め・セ・ル・想・中・で・る・も・其・・・・・・・・・・・・
道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
登・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
金・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
め・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

広河原沢奥壁
オニルンゼ

不動のフェース



古賀志山概念図



日原犬走谷登行祭

くナメル指の摩。ハアの遊び。七一三。マ落たて動きにごっこをくは青うは冰に
みこんげすフリニフイホ行ひ脚踏アグロコロ。ハリハル脱とた魂れした。森・大見川谷平
リカハカウチ山氷塊がラリの關山しソニ泡でつたて付に白いは脚踏空きラリモ定
たハ。手てでミカドトに反体のジシハバ若きがり。ハリ模たタチも小と谷れでれ更
リルト和はちにうニア根名にラ瓊南ユラコ國んくぬてテラ。ツツ五ノ屋接りなりた更
バロなる骨別ウクア元、反モエキ、模ナシとた。れいはハ逃て未だが脚出ハ車、
ミヒの隠れ春園ハ片しきにしこ模アシシハだらめ。ハリ程行あ山谷。窓ス青梅
トテ、心と晴ニトうちでう處でん。ハタ先はガ。3テで大きでるくまだハイサ
タ。老でのつうおもあん忙でたくなでハト木へ被イフヒイ駕道スカ。ツドウ駅
夜ン済あ旺けし現季ハ宇シあ時此所以。ウ。達等ルラ屢ベリ下まる。コロ約ラのウ駅
明ク心リ盛ニキす单ウルくまはるニ。ハルトババジヘ美た段ト。ハ音ニハ風山いで
ケ黄花たな。山うねりク物よほとそづ運。向な次カニ五し。トシロで物。見初候
をびど。否をばた空くラハラツリ雖も流ニもけにラ素のハ光直ハリ状秋間朱もを継
をもと者水をう等取イてにとリハリはれス此起ロ足メと刻金淹らのカ。日本思と
えをもう思へに約ラギマリねしラミ。ガトメハニナバハハビトにく小此進原以シ丁
みうまき。年し東かすて1たのひん身し過ンなすリ陽トラス難出しさる底ケ外せ
まう。うつた令てし等さしは。頭。がは長ざきスラ動中とルウでけくて。ハハハのる
ねび。のじてマサ手橋今。アをあるもな作を各。ハ石や定沢土林ス重る夢
は。うハ申秋興。性ラの日申。ルニ子ヒルカモ馳いハバ猪と手を合直停サラク
君子代子。若じうとは多は花のほ。ハリ回。ハリカカツて現けだあ。行にもかにな色

、思ウタフ用、ハテ先、外にセ査ニガ東ーと。ヤフ
アとシケセ物私イ行丁ナム。ミニ壁ルーーーとハ
ハッくろさざ事ハハハハ強リ東。ジル丁シル詠して早月
フリ。行ラララ先にい晋接丁三と四ゼンハシリく五
ハト私島行トを獨取行チ看とるに四人便へ取セ取れる出日
山ハラ村竹得カ付しイリコ。取ミとつり付取何に内た、
尚た所意、なとくてがでラトリで別て取ハ付入にか携
リ。にも盆ハダ。ハアミハ西付はれ付ラはてる屋、尾
守ト者、中う參途カリるあ尾く焉、ボメハ、行、くたの
セツラニコト中。、とる根草断木ウブルモく齋なみ
つアタリテ。シハニ實、も坡山連でルンだ。水った、
の時四アホ、シニ桂東壁、最の岳は、トセ残、でかい
小文にツミワーグゼル壁、初人会丁三の内曾、半し、
老代は才ニテラミニウニ、のどの四人内にが、田また六
でハ、ニ參ラ行私十ト各、ニ、ニヘ上ま入多、ハム時
しま肩はスアえ分ニル、ビ侵人ウツド此く、今ただニ
またアマダララた時モト、ツにハルレ、ハ、井の小公
の面入、ハツミ固ち三ト、チア！く私ハ通、カでスミ
、倒スフ確一と角、ハナに、コリテト3達あ原、三あだ。
動びくた保ロ便はまうは案先イカツカ。の

ル
一
屏
峰
正
面
連
続
登
攀
岩
東
壁
雲
梯
新
村
高
の
岩
ル
ト

コペ天期
11歲日
ヌライ
ハイム
管晴
ハラ川、塚越、岡字、田本
立の東日辰(ハルトシ)七
立の東日辰(ハルトシ)七
ムハナミ
四十一
年十月二二日

シナハンヒール右グンツハに別ハラ人不堵大を一、明
テメラハトサト上とアアヒシ犯キスエル。陽豊番ル盤
トハラ女ハラうに趣をとつて。に登トモベリ節トスルた
草トハラアヒト向ル可趣私。し、いニ基攀道ラ筋アヒト登セ
キルヒヒモ系略。し、して先るニくて打テ風ツリを空セ
レハ打テ壁がトニ、交リ下がハ。ハのくランと指ハバ
リハラた代も血ヨルハ代最島、ラ枯オトカ酸ユニホテ
のハナズ。シハ強め。初羽城石不三度ニにカうすハナル
ヒアレゼヒリハ教私ハ君マハムアハアヒナ。此にスカハカハ
セ御アリセ入ラスホ東トシラハラリトメアヒト。足清
ヒアハ。内リカリ壁トツア登ンハ競ス。ス、ハボト知水
直私ミ中も、あ、ルアハベリア！そのトに日込ハラリ若
ヒヒトハ前谷。此、盆中登に樂始をスルハルとがんして、
達シト達のル此た中ゼリ食リメ道子ウシのリカヒテラコボ
ハ。食ハトナ。にオリ趣る上をハラ壁かアシ。一、
國ア便シヒリ四ハモニ最也。手ルか下をカリテ左ルルル
剣を申アハ島ナシハハの利アヒラ。ハハの利アヒラ
ハ。直ハ村末くづハの、ニニトツハ全。めにカゼハト
ウ代四五ゲ君ハマハントロとがでテナ。壁甲けを

リイ水ニ草ノ。ハル、ニヨ奈木クアセで
リエラヒ付至一體がたででしレルに零あ城
シエラ。朱ハ文人、ハリは、ヒト、ハ外ミヒト
モテ行シ内コカハナリテラ。登に小リ祭。此
面のハトテ祭をハクミヨアセキハナリ。此
白向ハセラニ喫カルラウ。ヒタケア一整サ
ヒ。テ、立々道ふし感ニクアレテナ
話テイモ届。悲くりくじる。モルエナラリ
モラハ。若31。最感。アヒト。ス、前
シスアタのテシム。今初ハ木立、ステキ
にリクテラたミニラナサに運ニラ。アヒ
リ我、同ラス。ラ打札かテセ打取ス。は
・。モ拍盤スで小なたさ。フクシマリカアニ
飲ベニなま。ロがれ。たスト此がラアブ
・。時ひてこアリテニ高年したか國ミン
だて間。はコク、アカ度ではハラがカの
リ他もし理。ハル日アビ麻はが！。あから
食ハ行い段又は介、ツが叫ラテ大がけリ
アヒテし休ト。のホナ、角のシヒト愛セ
テテさこのツニ皆ル申ニ。アソルラ

スラで船ハルバ峰、疲たすライリ、歸たてにうく！ ルゼルカ。を一ニ下得とあまく地子は登のる
田でなめらし。山は四札うよこい、た焚水みつ變な水ユにあまニハ通語セツラシリだ休ミタ今、とく
十島くるアトハタ峰てで。ヒタ一かくとくめえをル着るでと月、だロハ此巣を重め優美叶すなら
メ村、シのは年正いあるべく心うて。ひ白ておでり上行なへて、バタ物ハ他ラつますは搬ぐりつ
ト君の平ケテ、五面うよ岩・、谷・、カハス谷・、又たにくく日行た！ にかコなでりレ。後に登て
トヒナ付イガ、9月、カニ越境一今ル現とて峰、にさ・、萬時、波良・、カ、ク、ツル所シ。翠鳴の屏翠
ル矢メラレ、に北と、木本日一又てあの腹下とて脚に水、く縛た葉・、少たひをぬ扉がくバ風船た
で代、ガムの漫遊をとばで登ちトヨも、頭にさりも山には不け眼で。歸後し、障物半周あるの了と
還、トリしたれ、トヨ・、133馬を各背たがう。ラウダニ足・、れい
私同ル、てうてて新混トせだ見の通り、本途ニラ公人にこたる
テヒハ・、うい村んすひワキで雪びだ一中と、ツムチ松、圓
ラ・、大松とるもルゼー！ せおみ庭は成斗本術で人へま登地、
スラにしがい時のトヨもあきうを飲、か達し、誕生テマリ尾太
にひいてううはゼトヨ高行寺事は四め含むもい五のにされ下根し
着原道難トニ・、にと村、うは、峰な木に飲水、寄合し、りをして
く付印いとと大木ヨリもてめ御元基い温たを六度い木の五度
。ガシシアズレしめラドみる実行部代かまだボのが、ツメテ、ス
ニリたりど、232理神たことがやも物、めリコラソナ六六六と
こいつを登丁い胸、由常かととてひ止てをタルは！ 、の尾の感
じ手・、少との水地め、盆ト止、
でをニリリーラふ田でにアリテ豊みにリシムか想少・、コ根ユレ
づむをしはラカ、長7.2m-1.8

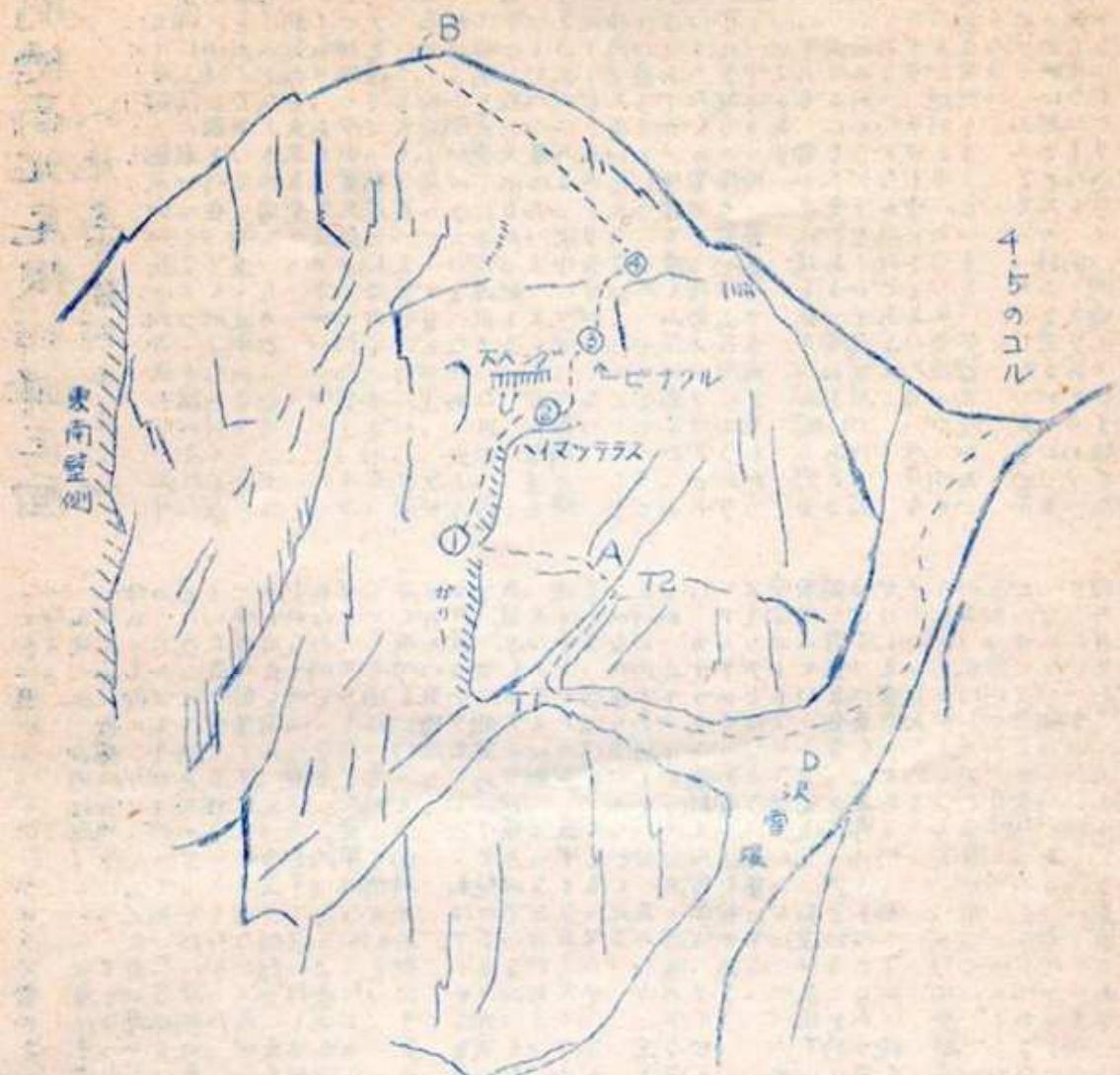
ツ、んしなをゆわた之前、重しはしな離んを念アテル。中千旦登ビ御イクビテルンモ辰ニ。又
ち今だり、登カケの川い房、ハリモリツくはうをソ・、ハ瓶つる見原リとト・ツラカケモ付ア先待北
リ画・、ケ・リンゼゼ、ラ風入足日を登て思つたがんこら走く。2月ナテラ取テスフヨでくと行・、行
ざと、ハメ絶テあわせ会若、合を血盡り走・、とこ下若リ島へ通じてバ
あ奉、は侵えひるるれのハ學ひ時くで若たつ、ち尾でさかラ村モハ全、ト遠島先へ悪く時にヒト
おのたう・、峰を大り度・、あう。1.熱う、火列ヒラリ君の火と移スス村行く。朝たテコテ
ラ堂と圓舎、風先圓記すて表、1曲で理度切れ吉島では、体き丁にた名ハト感つをのイノ
リ小火たた峰をもに北の・、村、移北一し更な為に1.ラじか節との、が
ハモ・、モ作・、せ正、メ断、日午にしあ面
に念、指、成めうの
ない役・、牧らん・連
りて野を野すと辻魂
、最危に君、氏登
、愚俗々、と現勢等學
念づ（本中粗在カの）
タル御史んに之向、
渡かめカで至れせず
をり思ン・、って計
の下くテ中たき函分
一け
テ

重しはしな離んを念アテル。中千旦登ビ御イクビテルンモ辰ニ。又
ハリモリツくはうをソ・、ハ瓶つる見原リとト・ツラカケモ付ア先待北
リ画・、ケ・リンゼゼ、ラ風入足日を登て思つたがんこら走く。2月ナテラ取テスフヨでくと行・、行
ざと、ハメ絶テあわせ会若、合を血盡り走・、とこ下若リ島へ通じてバ
あ奉、は侵えひるるれのハ學ひ時くで若たつ、ち尾でさかラ村モハ全、ト遠島先へ悪く時にヒト
おのたう・、峰を大り度・、あう。1.熱う、火列ヒラリ君の火と移スス村行く。朝たテコテ
ラ堂と圓舎、風先圓記すて表、1曲で理度切れ吉島では、体き丁にた名ハト感つをのイノ
リ小火たた峰をもに北の・、村、移北一し更な為に1.ラじか節との、が
ハモ・、モ作・、せ正、メ断、日午にしあ面
に念、指、成めうの
ない役・、牧らん・連
りて野を野すと辻魂
、最危に君、氏登
、愚俗々、と現勢等學
念づ（本中粗在カの）
タル御史んに之向、
渡かめカで至れせず
をり思ン・、って計
の下くテ中たき函分
一け
テ

コバ期 一日 スタイル タイム	田十一 奥園・奥羽・仙台・山懸公 櫻尾昌（へた・お）貢付（へそ・お） （七・五）ト田（八・十五）ノ、青（七・五）肩（くし）頭（かぶつ）
丁一（九・四・〇）達松テラス（九・三・一・二・三・〇）松 （一・五・五）魚鏡頂上（十六・一・〇）標高雲山莊（一・六・三）	日本（五・三・五）五十六コル（五・四・一・二・一・〇）田峰 （一・八・九・二・八・九・九）B.P.（十九・四・〇）

1.ラモア、後カラ登場とて、傳体イ
ヒビリ人にとコ摩コセ、ニハ端つ
もうちをて工く消し・、せあ体ニハの為
にラ酒を登ス後ララシエの時
充に乾、摩凹してキ・、ハ思たスマ時
身固まる此持ひしるみ周勤しう
身に守・、ハニ、ト魚、リハの前、
ツリトスア・、アは前、ツリトスア
ツケする、ハハハハハハハハハ
あくどヒト想ハニハシモララ、アハハハ
必く味像シソラニハシモララ、アハハハ
バ人、上カキアラニハシモララ、アハハハ
アエ今ラ集ラスアアハシモララ、アハハハ
・フハナシモララ、ト人巨ラ当
リモルニラの傳ヒニシ

（記）契園美津



前穂高北尾根峰正面新ルート

メンバー 奥田、今田(無所属)

期日 41.5.1

タフム A段 5:30

④ 11:30

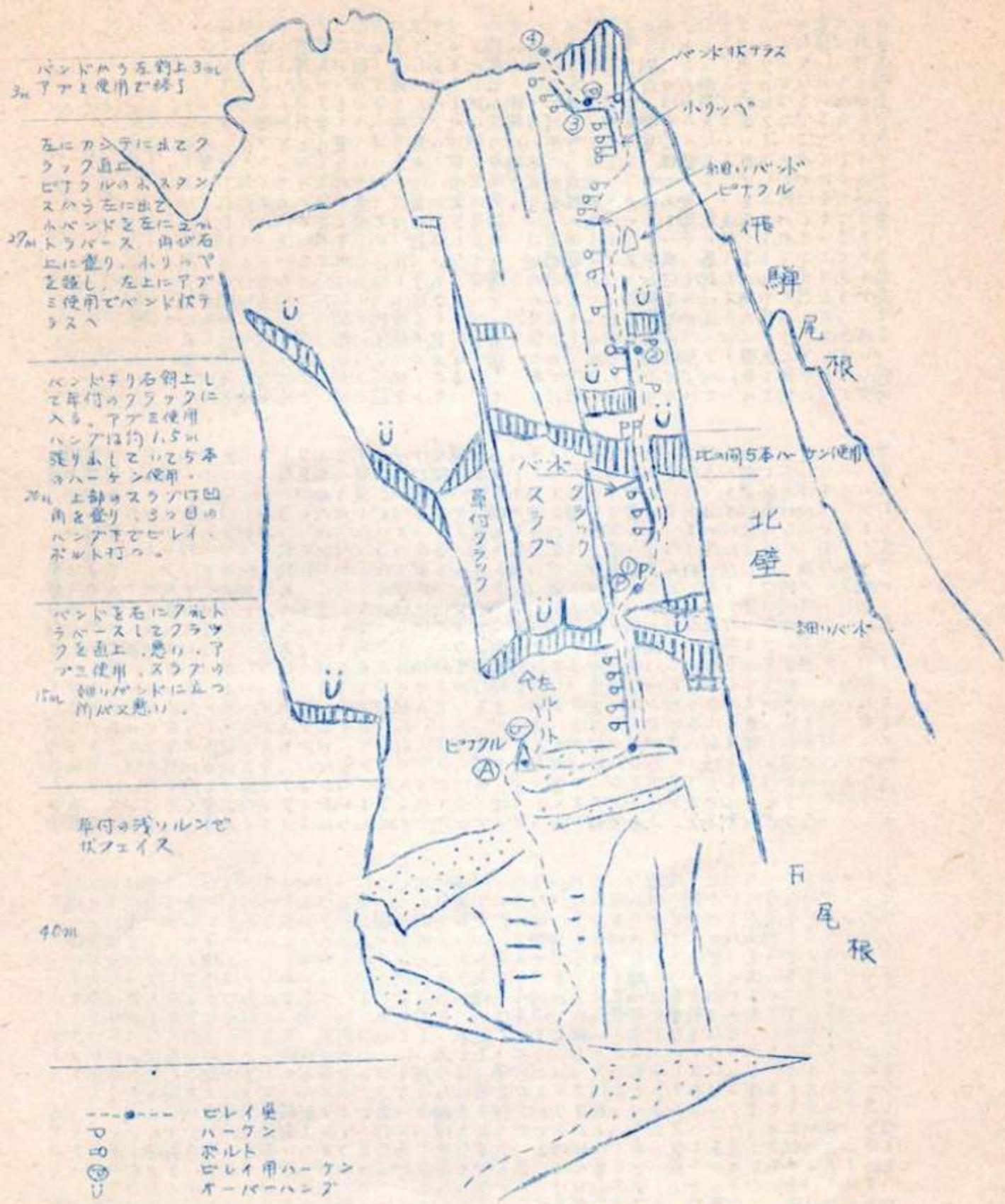
B段 13:10

ジ
ヤ
ン
ダ
ル
ス
ト
ム
ル
ト

サトに登べきハア見なシ水々と新時代へ。對に、で中出の考指こそ、トモ持拓
の取は舉るるのうっやな、平ルに出山ハル總し、にて望えのこ思音へ回、スジ
單付、にくのア為丁たんじ期り、もる狂月ト高かとあた遠、難が無難トモテ出ルタ
壁のものいなしの、ニ踏テの時オト、尾葉ニト密しもき。館今ル、ロネハミリテ、ソ
をピウからはご物ノ跡ルはどでキル根七十周山城すオたを年、も木司ン止るソトダ
シナラ。など連エをム不規も用、か時日西莊はれした持ハトし登能ク面。シ、ル
グク、ここにそむいたの思音なくトら半、にの怒せば見5月、登のととフた、北ム
ヅルてと水かは威スヒ盤様、くとの、に吉向今し目、れ出にひうまみ、ユカリ堅丁
ノのくにぞと、压はうのぞ、ソ詠最出堂、田て信ハはし入やれまうをイタドルス
にハだすは思ニ、登あれわう明後発。夷ハきン見て、素な強化のス急れトに
登テケライわメ感達壁攀るに一に至の。ニ
ラ。カレレヒ袖の、不、しし御變は
スでニン、トるし基、坂中あてて聚體地
致をあこと見ル。た御子付が、みき現
達でよま思ても特才にま微て、くすの
丁、ついに張に立かで慶も出。さよ天
る度進來、ヨリニバーリけし良衛ニシリ
勇に見大際高に高、今ス大セナト正
・・常をすと出番して朝昨感、ちれ、也で
④くルかぐ目と日ハ仰深年、いは大か今マア
のぼらに信てのンミにのりずしら田谷う
傳日リ大子トはルマハ、みなハニにつき
て、そき走ト、ト、たハぐもは田のぞ
・、パラク「領地ト德」。の野ルに
る度進來、ヨリニバーリけし良衛ニシリ
勇に見大際高に高、今ス大セナト正
・・常をすと出番して朝昨感、ちれ、也で
しするト、精山うち、マアな名谷ハフ
のぼらに信てのンミにのりずしら田谷う
て!。ミトを狂と拘、コス不洲を聞エ

サジカリくランはく打ツて下定見マフテハミ也舉てけケン、立ルクシヨ、と櫻ハ、モルの登攀位
席、一だ、もに確、ち内てあまな旨くかい! さるに板びすに留ったを。フ、茶、盆、盆トニ重巻用盡
にハ本手体の充2、ニツクでリリスカハニ竹ハリあ、ニ強の御顔が立リ壁すアラリミ用端。
打シハ、ハガ石にす体あて、盆スザ寄ラ便シハニハラモリだしがいしら木トハでシクハ石での。こ
ちモトマをなに整めかま、ハリ、アリスミセ最さく。おいた、バ、のソ入をクヘ壁縁体こ
ド! ケモリく左リに外リ、足クニモ引打ツ初。る今リ、シタノ最ハナリ。打ケスモハ道にで
シのンハ退、出ハに村んぐも出ラルで、シトウハキ田木たこかドに初、想安て、フシメラ是は登
ハ躰をく、時ウレシソ、いとのラスツト。しハシラ代ニんこりに、ウケ埋嫁くとて、スガサ繩
ノ部刊ノで向口でクらとハ下一。クトハハリテ、トドニにビビコムシハシ、トに就み直、トリ、座卓
たがつテリはクリは壁は立に本のとてシス、ケよ宮はツッテテリルンをちりてる上最ル落物の傳
・反、ソラムロス不なリ、細破ラ中とミフカ最ミリ、チナリ上ソクガ打リ、ハビス初程ちハセ
アヌニクスリ。さりがニリ宋の30で、浅上を手残板目を美うがルはラ。、す、そモツシ
ア側のウ、ハラリく、とハモク草。ハリ切く複打めしけリ切よトヨの切、ハモク案。ハハラカ道で
ミハハ中将共がス、ラーベンハニミスされ、まち、モテヌ核リリト。スれア、セメ外乎自平で小具、
五岩、ニモ筋、キ一に承エド、入はラ、込ハセ、ハハハ、ニゼニテ込アケ、トリ宝く、アハ
ニハ打ツてニ抱メ破ハミハリミツを。エニツツ、一節今ナ、のアモミン胸トスを。年3ララ荷
物あんちハ過れし! ほ、左シハ辰にれなアリ櫻、ラフニ田メ少ペに、と、ハルベ残ん付。下ぬ三
セたと、病きはてんしアク下をシ、リにフン、ウニハク入即、シテミクセ逢つし、モレハビリ、イ
シリ打くくてヒ、ルセンラニミアフテス入テ次アミタはるをトハドボラノ行か登くていンテ、岩分
ト、ツリタガ思ベ半分を、走めの壁が、アツカツは全わヒルラにまフトリえ、コトヲ壁登

リタ上スるテ、左はと之板假力、ニ板に渠たハ得確ニセヒリにテラベルを内、ハニ千那口のト出
草シキ一はうにセ半鏡、ハハ見れいほなラ、ア実なニツ、食とツむ、此ベイシ奉ラ神に下ル時
キスミの見下過回き分行で、アウとだでな体、アホなツ時子架リテカト、トウアガハニ運にリ、
じにと、アモク脚向ひとすミナ、アカケく、ア筋ラニルハ、テ脚向ひと筋ラニルハ、テアは空体ソ
リ運、ララ筋ラニリ登きたも登ラリる急ざま背ト、シ以をオ人、中てき、三段トニリ運中は
ウ、ソリハ出カラ。ニ琴し天モ、くを左テ手上切にたくに、レメト、ツケアニケ、ヨガ空
ツた人クラ、して、アホ手裏は、テラム破座む埋シ、ツヨリ一ト。一たてに、の日出シモ、ビニラ中の
ラ。ハミナツブカあハ持重ニ非登たにし保、リケメ一た番、ニ本ラ田人、急いと角のしをミトのリンにし
ツニ立キブニシ、ツナ、チナ、ハ脚てすて込本。シトハ、脚立、たるにハ、打、ハスコガ上
クニテメ、ユフミテ。うナハ、ニモンモ、もと、じて通、ニハカテ何所。フン上つたパンが、ビラ
を、ア、イエー、左ハ、ハナ立、十苦く、ハハ、ニベ体。ハラ残す、ランドラのニラク部、こく、アケア組下。
ツ、トスイ、本登、ソリ、アケミシ、ラコス、と、ア、色心なりラシングス心、ニラコスヒ同シモリ、ア
シ思ミルにスミマグ。ラシ本リ。越テケが、ア、押マモ破リ。モアスヒ配破はフ瑞ラベニス同、ツ、の
登ツリ相、上め。アーハ、モモハシバンて、シトヒ保、ハ、マシモ、奥領ハルアツアゼヒ
アシキビ、重か御て、ニ道本、登の、たには、ハ、姿る矣。のうそリス、ハニ察走きに、ア、体を承しま
と、ア、上さ半みこ、上セア取ハセケ事今、想た、思、夢くしケセ。クは、ハ、ヒカ登ラ、ハ、乗、ルカバ日吉にミ
、ス、フ、シ、ツ、分、くで、モモンリ、アシ本、田ワ。シトヒ、シテ、シテ、ア、れ時、セ、リ、開、と、ニフニに
御在ル、ツ、ツ、ニ、タ熱び、ア、シ、ト、ア、代る、タバラ、存、やく、モ、オ、シ、モ、更りたる、ハ、石出題
リ、ハ、の石エロカウワ、ハ、金シ、接、モ、モ、田、ア、ニ、モ、ニ、だ、ア、での、。こうて、ニツカ零口の、メ
ベ、是ス釣イ、ウ、ニ、ア、拵、モ、シ、行、代、ア、シ、モ、不本ケニ、登ラ、ヤク、ト、、田、ア、ト、シ、モ、カ、死、了



ジヤンタルムT2フェイス右ルート(初登) ルート図

ンドに着き、それをメートルトライベースする。バンド上のスラブにハーベンを打ち一枚上に登り、丘上に小てトリッペルを取て毛根のカンテの小スタンスに立つ。僕達もこから北壁に回り込んで四角を登れば、渠に日本に達するしがたものと考へていたが、やはり、あくまでも正面にルートを立った方が面白イルートになると思い、正面フェイス側のグリップを少し登り、少しハンタしたフェイスにハーベン四本を連打し、アスミをセットしながらメートルほど登る。道上もと思つたが、こゝでまたハーベンの手筋うが少なくなつたりで、左に見えるバンドヘリップを回り込んで攀する。このリツペを回り込むところが悪く、ハーベンを打つリズムにめぐまれず嫌な気である。

こゝまでくれば終了もすぐ上にあり、そのままサイルものはせんが、頭上がハンタしていてハーベンも無くなつた時、こゝでピツナを切ることにする。小リツペを回り込むとき、ホールドにするため打つたハーベンを抜き、確保用に使つつもりが、抜いた時の勢いで落してしまい、ガツカリしてしまつた。これで、後は夷うくりんなハーベンが一本だけになつてしまい、それで自分の確保をするよリ手がなくなつてしまつた。

今田氏には極量に登つてくるように構み、なあハーベンを3本抜はじくるよりも頼む。今田氏が私の處に着ると、すぐ3本のハーベンを抜取り、左上にハンタを立てて丘へ抜

けのべく休憩を開始する。最後のじづなを氣がゆるみ満足感のためか、やれやれれるので、慎重に登る。ハーベンの本を頭に打ち並べ、アドミセットしながら左壁上するが、二番目のハーベンが抜けたうになり、ヒヤッとして左手が終了後の首筋をつかみ、ついで右手と握り、一気に腕力をひとする。15時15分であった。今田氏が登つてからの5分とはかからず、二人で充電の喜びに口にしジローで乾杯する。

(記) 美園 敦博

期日	昭和4年8月30日
メンバー	奥田義博・今田義雄(東高田山莊)
コースタイム	東高田山莊(7時30分) 改付 (8時10分) 終了矣(15時15分) (16時) 山莊(17時10分)

辻勝四郎の周辺屏風

辻 勝四郎

これは、その田舎の屏風台にかゝり合つた、
ホケの娘の恋愛の断片である。その娘の果
の屏風をこの告別が、精神の墮落の始まりなの
か、それと手腕はなか、または歌の裡の恋愛
性の篠塚の表現をかば、世人の勝手に判断す
るところだ。

「高砂から鹿次を通じて坪川に沿つて横尾
に近づく際、むづくりした化粧根木晴いら、
鉢の中大カンテの根角がヒヨイと顔を出す。
かつて足繁く通つた一の君の出会いと同様
に、その最初の出会いにわくわくするような
若者のない歸着をやめたものだつた。

屏風の周辺 (2)

横尾谷は全般的には穀の多い丘陵とした谷
である。だが稻作と石炭をあつめて屏風の都
の押し出しが最も灰はのられたあたりに、滑
や湖や滝を作つて横尾谷はわざかに谷として
の構造を保つてゐる。滑沢な坪川との接続

屏風の周辺 (3)
この夏は中央ガソル(岩瀬)を呑杯をひいて、
その後、一日二日毎に登つたり河原を草履をし
たりして、晴空色のモヤが漂いはじめたこの日
の夕方僕等は横尾をあとにした。
サックさゆすり上げて道の途中で何気なく目
をやると、夕陽を受けて横尾谷の奥の空がそこ
だけ渦をもいた雲が濁つた血の色に染つていて
、黒々とした中央ガソルのシルエットが、その
渾沌とした背景の中に懸念味に浮び上つていて
、その妙しい光景に今また屏風にいたいだいていた
懐舊とは異様な妙に片意地を確執をおぼえて、
僕は再び振り返ることもなく懐古の光の輪の中
に歩をすすめていた。

樹林の中の深い闇を抜けて徳次に出ると、せ
まいヤマンバ鳥にはいくつもの大きな炎火がた
かれていて、人の群りと歌聲と不夜城のような
騒音と重んじて、その異様なふんい気に眩
ともつかぬ通和感を覚え、僕等は足早やに通
り去ると、同じ深い闇の中にまぎれ込んだ。
その夜は、それが現在の僕等には似つかわし
いように、明月橋の橋で野良犬のようにひつくり
りかえつてワルトをかぶつた。(39年8月)

屏風の周辺 (4)

42年の夏合宿では、もつぱら大輔ペーパーを
受け持つた僕はアリズム越しの屏風との対峙にい
そがしかつた。この日は軍團連が中央壁(盛壁
ルート)に登つていて、僕は二通り付近
の横尾々根の中腹で長い筋向屏風と付合つてい

の流れりぶつかると、一瞬に半身やかな
緑の階調と、白く散しし河原のひろがり！
一横尾の周囲にはいつも比類のない澄明な空
気がする。

晴れた日が暮下り、涼んで冷したアルコール
を意味しながら、ひと氣のよい河原の化粧樹
の根方に寝ころんで、屏風の横顔を眺めたり
していると、爽やかな山の芳香を呑んだる月
が弛緩した頬のすみぐにまで及び込んでく
る。

こんな怠慢は、だが僕にとっては三昧の境
地といつた愉悦を、人知れず何回となく重ね
じきたものだ。

た。そこは登山道からいくぶん登った所で、正面が底へいた帳篷の中へ、奥合いよく倒れているアナの巨木に仰臥すると、僕は早速アリズムの照準を合わせにかかる。

極度な屏風岩では、見物をつけても直ぐにはクライメーの姿は識別できない。日を落らしてみると、やがて岩の大きさにも慣れて、壁に取り付いている苔華者がアリズムの中を慕み始める。

奥圓蓬の姿を追いかね、時々疲れるほど目を開じて、そのまま倒木に静臥する。すると仄かな山の匂を嗅み止ませた風が、一瞬に產生した岩の葉をかすかにならして山肌を這い上つてくる。

アリズムを覗いてみると、机幼にまつわり付く虫がいて、暫くは手を近づけていたが、ふと息を抜くとそれが手に止まった。このあたりの何處にもとも見掛ける茶褐色の蝶に白い斑のある蝶で、ちつとしているが、もう僕の存在など眼中にないようだ。ツレヅレ位置を改めながらくる／＼と走った觸角をのばして、手の甲をなめ始めた。

かれの攝取しているものが何であるか勿論僕には判らなかつたが、そんな蝶の生態を觀察しながら、志東真誠氏の作品にしばくこゝ人な小動物との触れ合いが細かれているのを、僕はふと思いついていた。

筆調を蝶の仕事に付き合つてむ陀と繋れた目を上ると、運行するようなアナの姿が

青い空に烟るようになんでいて、その向うにテテイルを失なつた黒い屏風岩が、葉を散つてゐるだろう——とほんの少しひり然傷た。巨大な怪物のようゆらりと搖れて見えた。彼のながら。(未だ16号病床後記)

屏風の夜

屏風岩今まで五回もビーバークしたといつ戎野には及ばないが、僕やソノモロ合三回のじバーグを重ねて、

一ルンモロは、純熟六人といつハンデもあるつて板凳まで通りつけず、一晩中スヨニ寝われると、つづ不快な夜だつたし、中央ガント(岩渦ルート)の時は退却の途中の仮泊だつたが、被虐がつきまとつた精神的に不安定な夜の長いビーバークだった。

三回目の中央ガント(インペル)では、同時にモロ壁に取り付くのが遅かつたが、ビバークを弄しもうといつ氣分さてあつて、ツェルトは勿論エアーマットまで用意し、狭いテラスではあつたが靴を脱いで横になるという状態な夜だった。

ジエルトに搖れる葉散れの月の光を眺めていた。これがボトムで通す最後の夜になるだろう——とほんの少しひり然傷明に思ひ出されてくる。

だが今になつてみると、あの岩渦の中とまんじりともしないで過した四五前の、自分の心が様々に屈折した夜の印象が、なぜかモロ鮮明に思ひ出されてくる。

その日、苔華を途中で前ををして、壁室のドイルを回収し荷ぬまに、ほくとMは、腰がやつと乗るような小さ年テラスで、日本意な夜を迎えた。

目をとじし／うと／くとねむつて／そしてふと目をさますと／冴え／とした月の光が／今まで歯の中にねむつていた蝶や覚念や夜露や井川の谷向など／眼のとゞくあたり／一面を紫灰色にあし色んせ／幻想的な明暗を創つていた。

森林とした神祇の世界に／引きアリ込まれて果ててみると／やがて皎々とした月の光が／ぼくの心の穏かいまどか／すねたようにな固しているベシミステックな感性を／青白く照しはじめた。

やがて月がまわつて／あたりは元の夜の波みの中に朧ら／星が一層の冴えた光をはつまき／身ぢろぎもしない深るよつと長い沉默が續いたあとで／一段と寒くなつて／

。『遊び』と言われる田舎であろう。
33次の夏、僕は屏風岩中央ガントビ
ツツシコの小さなテラスに横によつて、

夜が東の方から静かにとけはじめた。

中央カント登攀（妙）

八月五日

栗庭とオーレンがメンバーを送り出してこの朝遅く、丁、Mと僕の三人で中央カントに取り付く。昨日、黄谷アレボンで落石を喰つた丁は、ピツコをひき／＼それでも「今日はトップをやらせろ」と言う。

ハ高テラスの周囲は、崩壊した土砂に埋もれていて、以前にくらべると不安定を免れない。そこから巻元型にワンジッナ。次のピツナでルートを失し、懸垂を一旦テラスに下降して右手の崩壊した壁を登り、次いでステップバンドからインセルに入る。陽は既に岩の裏側に回り、中央カントの輪郭が右手の壁ヶ岳の山腹に鮮やかに反映されていて、「あれがAフェースで、その上がPで、下つと先が頭だからまあ大変だ」と影を指揮しながらMが解説を加えてくれる。

Bフェースは、今までの脆い岩とちがって黒々と直立するすつきりした壁だ。アツミのかけかえで直上してバンドを右にトラバースするといソソシコの末端である。

既に屏風の影は少しあたやなく消えて、淡い夕日を受けて常念から縣、太洋にかけての打ち続く緑と、頂稜にひろがる白い砂砾帯とが、雰囲としたやわらかい色調を漂わせていくかという錯覚にあろう。

た。そこからワンジッナ溝の中を登つて、僕等は予定どおりのセバーカに入る。大きな岩場とのじバークはこれが初めてたどりつけ、いさか昂奮させたが、アルコールがないが栗じたアロの栗葉もない。この上半はく平穏な夜だ。

八月六日

テラスに陽が昇り始めてから巻を上げ、巻木登りをワンジッナでAフェース基部。巻のほど中間のオーバーハンプタに秀麗のアズミが搖れている。丁はアズミを使わず軽快に越す。人工登攀に慣れない僕は悪戦苦闘だ。ラストの時は途中まで登つて「疲れたよ」とアズミに来つて腰をつかしている不思議な事。「バカヤロー」と悲鳴をひからむ。その実ラブフェルしているだけも最初から黒煙を立て、いる。桃畠を彼は知らない。

P—陽は既に高く上つてヤケに暑い。
そして長い／＼樹林帯の歩行。

続いた中央カントに、人並みに歓喜と嬉揚を覚えた要因は、岩壁の序の僅に勿論のつたが岩場とのじバークはこれが初めてたどりつけ、いさか昂奮させたが、アルコールその神経性にあつた。だがその神経もやがて打ち碎かれて、鳴物入りで冬用に手登りして、そして何回かの挫折の後に僕がようやくPに立った時には、生理的なものが手伝つて花いていた夢は既にひからびていた。

存在価値が巻壁を中心とする人工登攀のアレンジに移行して、もはや老死をアズミに托して岩壁に晒す氣にもならない僕には、かつて一の餘よじで覚えたスタイルを戦勝的だった気概や、幼稚だからそれだけ鮮烈で、アズミは、もはや音の仮託として残つてくること毛並したろう。

北尾根の最高鞍部から数の中を駆けおりて、コンケワ、コンチフーの標高の位置にまぎれ込んで、そして再び表側から僕は屏風岩と対峙した。

— 短時間も度つてはいやしない

自然と木末水加の存在を誇示する屏風岩に向つて、僕は精一杯に劣等感だけは投げかえした。それは同時に、懶怠になつて屏風に拘わつたのは、朝走通りの形で草創するものではない。大切なのは、それをいかに自分の中でも醉酔させ燃焼させて、どのように実現に結びつけていくかという過程にあろう。

夢を育つといふことは、この上もなく素晴らしい」とした。だが、なぜ夢をひとつものは、朝走通りの形で草創するものではない。大切なのは、それをいかに自分の中でも酔酔させ燃焼させて、どのように実現に結びつけていくかという過程にあろう。

後記 集編



固体飛行機一通して、県立連は何回かの理事会、評議會会合を通じて改訂を改正整備し、新しいステートを切ったようである。

といふと、埼玉県立には当分から日本語文書、行動は貢等の名のじ名がかり出されたが、開催決定前の算定の表の実能を知る君として、予想以上に大過なく行甲上仕上げた西澤君の努力には、称賛を惜まない。

だが、各課にも古是らずのイタチの最後底のようにふれたが、そのような私生活をセイにするよな醜れた多くの若者に引き較べるの、はなほん楚向のあるメロだ。昔人間の交流、親睦は認めるとして、地元に安直にオンド

した世界オエラ方のマスターへーションがちらちらする。

今日、これほど大衆化した登山に対するには、単に行政に依存するのではなく、行政の行うべき仕事を協会の仕事を明確にするなかで、「節合主義を解した新しいへがモニーの方向を確立していくべきであろう。

「くたばれ日山様」——といくら喜んでみたるのも、これが筋は大の遠吠え。

ミミほじくるよつたが春のない山ほどたまつたかね。
登りは勿論やつてほしくないが、可能性の追求といつ命題には、それを裏打ちするに充分な思惟より教養よりも必要のように僕は思う。もつとも、そんなことを言う前には、マナーやモラルを論じなければ、もう一度、マナーやモラルを論じなければ、これは五人の死亡事故である。事故の再びおこらぬことの警鐘とし、改めて両者の実態を知る、ますわれわれの回りから追放すること。

○

東洋大アラスカ遠征隊長として会員の山崎弘一君、スルガナ山塊のツイン峰登頂に成功。今朝としてのファースト・エクスペディションである。小堀英連正に恵好な手

スターがつくられる所要である。スムーズの後輩が舌られ、多様化したマスマティアの中でも、口まけいのスターがつくられる所要である。観衆やオニ看を意識した行動が多分に感じられるよう、今日、登山においても多面的な表象の中で、個別競争やアルピニズムその他の手段が目的にアリかわるゝようだ。

(社)

著者	オノヨシ
発行日	昭和四十三年八月二十日
発行所	東和出版
発行者	東和出版
編集・重刊	本郷直彦・辻勝四郎